
3分経ったら天使が出来る

雨月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

3分経ったら天使が出来る

【Nコード】

N0796F

【作者名】

雨月

【あらすじ】

祖母の家を丸ごと貰った少年、神崎蒼疾。そんな彼が掃除の一段落に訪れた巨大な書庫の二階には面白い本が置いてあった。それによくと天使を使役することが出来るらしいのだ。

ブローグ？/第一話：3分経ったら天使が出来る（前書き）

不定期です。

プロローグ？/第一話：3分経ったら天使が出来る

プロローグ

俺の名前は神崎蒼疾という。

神様はいないと思っっているタイプで、好きな女性のタイプは年上のお姉さんが好きなのだ。いや、好きじゃないな、大好きだった。

話がそれってしまったが母がたの親であるばあちゃんは俺と違って信心深い人だった。神様がいると思ひ、天使もいると思っっていたのだ。ただ、不思議なもので何らかの宗教には入っていない。ばあちゃんの家の蔵には不思議な置物や棺桶のようなものなんてものはない。あったのだが、それこそ天井さえ埋め尽くさんばかりの本がたくさんおいてあった。種類は様々なもので絵本から悪魔を呼び出すといわれている本まで。殆どのジャンルを網羅していた。そして、何故だか十八歳以上の大人の本もきちんと常備されていたところを見るとあちらのほうは高校に入る前に死んだじいちゃんが集めたんだらうなと簡単に想像がついたりする。

そんなばあちゃんが亡くなってしまったのは一週間ほど前のことだった。

ばあちゃんの遺言状を預かっていた人（隣のおじいさんだった）は親族全員を集めた。無論、その中には俺が含まれている。

「えー、お金のほうは親族全員で分けてもらってかまわない。だが、この家は神崎蒼疾に全て譲り受ける。この件について文句をいうようならばその者には一切の遺産を分け与えない。たとえ、蒼疾の両親だったとしても。家に住む際は蒼疾の一人だけを認める」

その後、莫大な遺産（お金のほう）を多く手に入れようと様々なことで親族が骨肉の争いを始めたのだった。そんな光景を俺は横目で見ながら遺書を読ませてもらっていた。間違いなく、俺の名前が書かれている。

「あの、なんで俺に家なんかを渡したんでしょう」

「それはきつと君に受け継いでもらいたい何かがあるからじゃないかね」

おじさんはそう言って笑うのだった。受け継いでほしいものなんて想像できないし、蔵の本ぐらいしかないだろう。

「えっと、でも、家族三人で住むのにも広いですよ」

「ほっほっほ、少し君には大きいかもしれないけど家は喜んでいいよ」

「はあ……………」

次の日、俺は一人暮らしをはじめることとなった。

第一話

部屋数二十を軽く越えている、こんな馬鹿みたいな家を誰が掃除をするのだろうか、と俺は思いながら俺が最低使うであろうスペースを掃除しておくことにした。もし、両親がきれいに掃除をしるといっても一人でこの家の全てを掃除しようとは絶対に思わない。専門の業者を呼んでこき使ってやろうと思う。

「……………ふう、まあ、こんなものか」

炊事場、トイレ、風呂場、玄関に近い部屋を掃除終わると既に疲労感で胸がいつぱいになっていた。まあ、この家から高校までは近いのでバイクの免許を持っていない俺には得だ。

てつきり一人暮らしなんて許しそうになかった両親だったが、俺が一人暮らしをするのをあっさり認めしてくれたのだ。

「蒼疾、私たちはお母さんの財産を多くゲットして見せるわ」

「それまで一人でがんばるんだぞ？」

遺言どおり、俺がこの家を手に入れたことに関して誰一人として文句を言わなかった。大体、この家にあるものとしたら近くの蔵、まあ、書庫ぐらいなものだ。それ以外に価値がありそうなものといえれば……………古いテレビ、古い冷蔵庫、住居者がいない犬小屋……………こんなものだろう。比較的山の上のほうにあるのできつと売ったとこ

るでいい値段なんてつかないのだろうか。

まあ、高校生の俺がそんなことを考えていても仕方がないので書庫へと向かって歩き出していた。休憩のためではないが、その、なんだ、じいちゃんのコレクションをちょこつと確認しに行くことにしたのだ。

書庫の扉は固く閉ざされており、なんでそんなに嚴重にしているのか、理由をばあちゃんに教えてもらったはずなのだが思い出せない。子どもが勇んで入るような場所でもないのだが、近所の元気のいい子供が何度か侵入しようとして試みていたらしい。

ばあちゃんがその昔大事そうに持っていた鍵は今では俺の手の中にあり、当時は大きく見えていたその鍵も今では小さいものだった。「遺産は誰が一番多くもらえたんだろう」

ばあちゃんの子どもたちも十人近くいるのだ。今頃どこかの会議室でも借り切つて争っているころではないのだろうか。

そんなことを考えながら書庫の扉を開ける。久しぶりに人がやってきたので歓迎でもしているのか埃が舞つて、かび臭いにおいが俺を迎えてくれている。

さて、どこにじいちゃんのコレクションはあつただろうか。この書庫には二階があり、そこにも本棚がいくつがある。二階だっただろつか。そう思いながらはしごを上つて鍵のかかっている本棚の鍵を開ける。無論、その鍵の所有者もばあちゃんから俺へと移っている。基本的に大事な本はガラスケースに入っていて鍵がかけられている。これがまた、どんなガラスなのかわからないが以前誤つてつぼをぶつけてしまつても割れることはなかった。

きつと、ここにあるのだろうかと思い、引き戸を開けて中を確認する。

「ん」

厚い一冊の本が置かれている。どこの字かはわからないが、とりあえず四字ほど文字が書かれているようだった。興味をそそられたのでそれを持ち上げてみると不思議とその文字が理解できたような

気がした。

「天使召喚」

そうかかかれているようにも見える……とりあえず家の中で読むことにしてそれをもってはしごを降りる……。

鍵をかけるとき、なぜだかその書庫の中がざわついたような気がしたのだが、気のせいにするにしようとして俺は書庫に鍵をかけたのだった。

ちゃぶ台の上に五キロはあるであろうその本を載せる……今、思えばこんな重たいものをもってよくはしごを降りることが出来たよな……俺。

「えっと、何々……」

一ページにはこの本を使えば天使を使役できると書いてあった……というわけでもなく、きつとばあちゃんが翻訳して残してくれたたであるう紙にそう書かれていた。

「……この本にお湯をかけて三分。それだけであなたの家の冷蔵庫に使役された天使が入っています……か」

何だ、これ。馬鹿馬鹿しい……そう思いながらも俺はコンロにやかんをかけていた。次のページをめくってみると使役する条件が載っている。

「……三分たったらずぐに取り出してください。……が伸びてしまう恐れがあります……なんだ、これ」

何が伸びるか文字がにじんでいてよくわからなかった。んな、カツプめんじゃあるまいし……体がのびるのだろうか、天使の。信じられないといっているだろう。さて、冷蔵庫から天使が出ることに驚くべきか、天使が伸びてしまうことに驚くべきか……どうちだろうか。

そんなどうでもいいことに悩んでいた所為かやかんが俺を呼んでいた。

「おっとっと……」

さっさとやかんを手を持って本当にこの書物にかけていいのだから

うかと……思ったのだが、別にかまわないだろう。

「じぼぼぼ……」

湯気を立たせながらどんどん本は濡れていく。大丈夫なのだろうかとも思ったのだが、本に書かれていたことなのだし、浸しても大丈夫だろう。

「……………このぐらいか」

全体にまんべんなくお湯が染み渡った頃合で俺はやかんを再び水平にする。

「……………で、三分だな……………」

時計を確認する。今の時間帯が午前十時四十五分だから四十八分に冷蔵庫を開ければいいんだな……………

ぴんぱーん

そんな小気味いい音が聞こえてくる。どうやら誰かが来たようで、俺はその場を離れたのであった。

玄関先にたっていたのはにこやかな笑みをしている男性だった。

「どうも、新しくこの家に引っ越してきた方ですよね」

「ええ、まあ……………あの、なんですか」

「ああ、失礼……………実は、この家では新聞を取っていないようでしたので新聞の勧誘をしにきたんです。あなたがこの新聞を取れば……………」

その後、十分ほど弁舌さえわたる目の前の男性は一方的に話し続けていた。息継ぎをした隙を狙って俺はとてもの確であろう嘘をついた。

「あ……………その、今両親がいないのでまた今度にしてもらいたいですけど……………」

「ああ、そんなんですか。これは失礼致しました……………それではまた、日を改めて来ますね」

あっさりと下がっていった新聞勧誘者の男性に対してくたびれながらも俺は冷蔵庫を開けることを忘れていたことを思い出した。

出てくる天使の身長が三メートルを超えているのではないかと……………と、何故か想像してしまっていた。

「ん」

冷蔵庫の前に立つと、俺は違和感を覚える。冷蔵庫が動いている……………そんな気がしたのだ。そんな、まさか……………

冷蔵庫の扉を前にして、今日ほど戦慄を覚えたことなどなかったのだが、致し方ない。俺は一気に冷蔵庫の扉を開けた。

「はあ、やっと開けてもらえた……………で、契約した魔術師さんはあなたですよ」

そこには窮屈そうに入っている女の子がいた。腰までの長い金髪にブルーアイ。年は俺より二つぐらい下というぐらいだろうか？天使だからか頭の上には光輪が浮かんでいる。ちょっと触ってみたい。「えっと、それで何を求めるんですか」

あの本が本当だということをもって体験してしまう。藪をつついて蛇を出してしまった心境だ。

「え、あ……………すまん、その、遊びというか、天使が本当に出てくるかどうか試したかっただけなんだ。それより、三分以上たったら何が伸びるんだ」

「……………今、なんといいましたか」

天使のくりくりした目は大きく見開かれていた。

「だから、三分以上たったら何が伸びるんだ？」

「えっと……………何分ほどオーバーしてます」

時間を確認すると……………十分どころか二十分以上経っている。

「二十分以上かな」

「は……………二十分もっ」

驚愕したその顔は世界の終わりを告げられたかのようなだった。

「そんな、あと、百年この世界にいないといけないの」
一人でそんなことを言っている女の子に対しておれは首を傾げる
しかなかった。

第二話：天使の説教は長い（前書き）

作者、やる気不在のため、不定期です。

第二話：天使の説教は長い

第二話

「いいですか、天使などを呼び出すときはきちんと手順を踏んで目的あつてこそ呼ぶべき存在なんですよつ。お遊び程度で呼び出せば使役できない存在だって出てきます。きちんとそのことについて勉強したのですか。魔術師の基本ですよね」

もつかれこれ三十分ほど同じようなことを繰り返されているだろうか。その間俺はずっと正座なのだ。

そろそろ……………いや、既にお昼を過ぎようとしている。

「あゝ話を腰をおるようでも悪いんだが……………」

「……………何ですか」

不機嫌そうにこちらを見やる天使さんに俺は告げた。

「ちよつとおなか空いたから昼飯を作らせてくれ」

「何を悠長な……………」

ぐーっ……………

どこからかそんな音が聞こえてきて、この場に静寂が訪れた。

「……………認めます。私の分も作ってくださいませよね？」

「まあ、一応……………」

正座三十分しただけで俺の足は麻痺っていた。もやしつ子なので仕方がないと思ってほしい。その結果、よたよたとなりながらそのまま天使さんを巻き込んで倒れこむ。

「あいたた……………すまん」

「いえ……………その……………」

気がつけば俺は天使さんに覆いかぶさっており、天使さんの胸の上に右手が置かれていて股の間に体を割り込ませていた。

「その、こ、こういうことを所望しているならわざわざ『昼飯』と

いう暗喩を取らなくても……」

顔を上気させてこちらをあまり見ないようにしている天使さん。そんな彼女に俺は頭の中がピンク色に染まっていくのを感じた。

「誤解だ」

「その右手は……私の胸を捕らえて離していません」

「ま、まあ……そうだが……」

「どうぞ、ご自由に……」

何の覚悟を決めたのか……とうとう天使さんは目を瞑ってしまった……しょうがない、俺も男だ！

俺は天使さんの二つの穴に指をつっこんだ。

プスリ

「ふがつ」

天使さんが奇妙な声を出す。

「……残念ながら俺はぺちやぱいは好みじゃないんだ」

人差し指と中指を天使さんの鼻に突っ込んでいるこの状況。

「へ、へちやつ」

ぺちやぱいという言葉に反応したか、顔が真っ赤になって怒り出すか？と思ったので俺はさっさと鼻から指を抜いてから天使さんを立たせテーブルについておくよう命じた。

「ほら、そこに座っててくれ」

「……………」

ぶすつとした表情だったが、俺の言うことを素直に聞いてくれて天使さんは席についたのだった。

昼食後、未だにぶすつとしている天使さんにどうしたものかと思
った。

「なあ……………結局、どうやって天使を呼べばよかったんだ？」

「……………どうせ私はぺちやぱいですよ」

あちゃ〜これは完璧にあれだ、拗ねてるよ。さて、どうしたもの
か……………と考えているとやはり、こういうときは何かものでつるの
が最適だろう……………ところで、天使がという種族が欲しがるもの
で何だ。

考えた結果……………

「ほら、新しい……………白卵だよ〜」

「……………何しているのですか」

侮蔑のこもった瞳をこちらへと向けてくる天使さん……………あんた、
それでも天使か。まあ、天使さんが白いから白っぽいものを渡せば
よかったと思ったのだがどうやら違ったようだ。

「……………プリン」

「え」

「プリン一個で機嫌をなおしましょう」

「……………」

プリンで自ら買収されにきただどつ。さすが天使……………人間には
理解できないようだ。どういう思考を持っているのだろうか……………

幸か不幸か、俺のデザートのためにプリンを買っていたのだ。プ
リンを渡すとまるで獲物に飢えた獣みたいにプリンにありついてい
る天使さんを俺は眺める。

「うん、このプリン極上ですね。世界がプリンになってしまえばい
いのに……………」

「……………」

きつと、そんな世界で生き残っているのはこの生命体ぐらいだろ
うな……………地球侵略にやってくる宇宙人も消えてなくなるに違いな
い。天使全員、プリンが好きというのならこの世界は確実に終焉を
迎えるだろう。

「さて、午後の講義を始めましょうか」

「講義ってなんだよ」

「ええ、何か私に聞きたいことがあるのでしょうか」

おっと、確かにそうだった………先ほど聞いても無視されてしまったことを聞くことにしよう。

「あのさ、きちんと天使を呼ぶにはどうやったらいいんだ」

「まずですね、天使召喚の呪文を唱え、清めた水を温めてこの本にかけるのです」

面倒くさそうだ。

「術者の力量に見合った天使がその術者のもとへとやってくるのです。まあ、簡単に言うなら使役できる範囲でないとここにはこれませんけどね」

つまり、その術者でもなんでもない俺が呼ぶ事が出来たという目の前の天使さんは………

「ん、なんですか、その目は」

「なあ、あんたってパシリか」

「………し、失礼なっ」

俺が言うつと天使さんは激昂し始めた。

「そりゃまあ、確かにあちらでは色々先輩たちからいじめられたりしましたが私はパシリではなく善意から先輩たちのお手伝いをしていましたっ。二回に一回は失敗もしていましたが愛と勇気で乗り切っていましたよ。こちらに呼ばれるとき先輩たちが『ああ、やっ」とこれで少しの間は仕事はかどる』とかいていたような気がしないでもないですがきつと気のせいです」

あゝ………やっぱ、一般市民の俺が呼び出した天使さんはそんなものなのね。きつと能力的に全部がっかりな感じなのだろう。

「じゃあさ、天使って言うからには何かできるんだろ」

「勿論ですよ」

胸を張ってそう答える天使さんに俺はあまり期待をしていなかったが一応たずねてみた。

「何が出来るんだ」

「私は愛の天使です」

どっちかというところ『哀の天使』だな。

「このラヴ・アーチャーさえあれば修羅場寸前の恋人たちもラブ
ブに戻せます」

白く輝く弓矢を取り出し、自慢する。なるほど、道具は本物そ
うだが……怪しいものだが。

「あ、その顔は信じてませんね」

「まあ、道具だけ見せられても信じれないな……」

実際にその道具を使ってみて本当にラブラブになるのかどうか調
べたいもんだな。まあ、こんなぼろい家の中で修羅場っている能天
気な連中はゴキブリぐらいなものじゃないかね？

「じゃあ、実際に使ってみましょう」

「あんな、悪いがこの家の中には俺とあんたしかいないぞ」

「任せてください、そこは私が何とかしてみます。えっとですね、
私が貴方の彼女役をして今から修羅場をつくります」

ふんふん……

「そして、ああ、そろそろ破局だな〜ってところで私（天使）が登
場します……そこで、ラヴアーチャーを使うんです」

「あ〜成る程な〜」

なんとなく、どうでも良かったので俺は鷹揚に頷いたのだった。

「でも、お前って俺の彼女役だろ。天使役も兼ねるのなら難しいだ
ろ」

「まあ、そこは頭を使ってフォローします」

どんなフォローなのだろうか。期待しておこう。

第三話・レンジで3分、悪魔が出来る。(前書き)

作者のやる気は傷心旅行中のため、不定期です。

第三話：レンジで3分、悪魔が出来る。

第三話

ラヴアーチャーだか何だか知らないがやつは道具の力はすごかった。まあ、たまにいるよな。持っている物のほうがすぐくて使っている奴のほうがしょぼいってことが。簡単に言うならば豚に真珠ってところだ。

「はい、蒼疾さんあーん」

「いや、そんなことをしなくていいから」

意外と手の力が強く、押し戻すことなど不可能だった。くっ、こんなにほっそりとしている癖になんて怪力だ。

「じゃ、じゃあ、私にあーんってしてくれるんですね」

ほっぺたを朱に染めてしつかりとは俺を見ない。俺は天使の両肩を掴んで揺さぶった。

「おいおい、しつかりしろよ」

「だ、駄目ですよ、蒼疾さんっ。二人だからと言ってこんな、いきなり」

何を寝ぼけているのか知らないが、まったくもって面倒な天使さんだ。どうやったら目を覚ますのだろうか。しばらくそっとしておいたほうがいいのだろうかと思っ立ち上がるうとすると今度は俺の手を掴む。一瞬だけ、トラックに手が潰されたような錯覚を覚えた。

「その、ど、どこに行くのですか」

「買い物」

「じゃあ、私も行きます。だって、蒼疾さんの彼女ですから」

ああ、完全に何か間違ったような見識が天使さんの中で生まれつつあるな。いや、恐るべきはやつのラヴアーチャーの力といべきか。

もう嫌というほどラヴアーチャーの力はわかった。

「なあ、お前の持っているラヴァーチャーって、効力を消したりできないのか」

「それは……えっと、どうでしたっけ。蒼疾さんがキスをしてくれたら思いだすかもしれません」

そういつて何かを期待するかのようになりと見る。

「……………」

くっ、なんだこのプレッシャーは。俺はこいつに対してキスなんてしなくちゃいけないのかよっ。

「な、なあ、いたずらしないで教えてくれよ」

「蒼疾さんの困った顔、大好きですよ」

くお、何という破壊力だ。女の子に大好きですよと面と向かって言われるのがこれほど俺の心にダメージを与えるとは……………。しかし、これはやつこのラヴァーチャーの力であってこいつの本心ではないのだ。俺は女に騙されるような男にならないと真つ赤な夕日に誓ったことをもう忘れたのかっ。

考える、神崎蒼疾っ。もしかしたらこういったことのためにあちゃんが残してくれているかもしれない。変な天使を呼び出す方法があるのだから何かそれに対抗する方法があるはずだ。

俺は再び、書庫へと足を伸ばすことにしたのだった。もちろん、天使さんもついてくる。

「えっと、こんな暗い所でその、あの」

もじもじとして、何かをしゃべっているが聞こえない、キコエナイ。今の俺にはそんなもの通用しない。悪魔のささやきだっ。

二階に上がり、鍵の掛けられていた柵を再び開放する。そして、次にすることは天使さんを前に出すことだった。

「なあ、この中に何かいいものはないか」

「いいものってどういうものことでしょう」

すぐくはずかしそうな表情を浮かべて俺に尋ねてくる。

「ん、そりゃあな、俺が困ったときのために何かばあちゃんが残してていそうな」

「はあ、よくはわかりませんがこれでしょうか」

手渡された本には『悪魔召喚』と書かれていた。うわあ、すつごく危なそうな一冊をチヨイスしてきたな、おい。

「あ、安心してもらっていいですけど低級です。低級悪魔ぐらいなら私、退治できますから。蒼疾さんの魂はあつちに言っても私だけのものです」

わざわざ人間界に天使と悪魔を呼びだして退治することなどないだろう。だがまあ、天使とついなす存在と考えられていそうだからなんとかかしてくれるかもしれないな。

一縷の希望を託して俺は悪魔召喚を行うことにしたのだった。

「あの、スルーしないでください」

「いや、してないよ、スルーなんてさ」

「召喚方法は電子レンジで三分か」

本当、この本自体がどういう仕組みなのだろうか。術者の名前を本に刻み、髪の毛を挟んでチンするそうである。

天使さんは多少うるさかったので縄で縛って転がしておいた。あの怪力ならばすぐにでも千切れそうなものだが嬉しそうな顔をしているのはなんでだろう。

三分後、電子レンジは黒煙を上げながら稼働停止し、俺はおそろおそろ扉を開ける。

「ふはははは、どこの誰だか知らないがこのわたしの封印を解いてくれたことを嬉しく思うぞ」

「……………」

手のひらサイズの漆黒のドレスをまとった女の子がそこにいた。

「おい、人間。貴様がわたしを復活させてくれたのだな」

「え、あ、はあ、そんなんですが」

「よし、褒美をくれてやる。この世界の半分をお前にやる」

「まあ、それはいいんです。そんなことよりお願いしたいことが」
「なんだ」

「天使のラヴアーチャーの効力をなくしてほしいんです」

「そういうと悪魔さんの顔が固まってしまった。」

「お、お前、ラヴアーチャーをわたしに向ける気が」

「は」

「くっ、恐ろしい人間のもとへと召喚されてしまったものだ。まさか、ラヴアーチャーなどという危険な代物を……しかし、何故人間がそんなものを……」

ひとしきりぶつぶつぶやいたかと思うと目を閉じて両手を広げた。背中に生えている小さくて黒い羽根も一緒に広げる。

「いいだろう。このわたしにラヴアーチャーを向けるがよい」

「はあ、それで解決するのでしょうか」

「ああ、すべて解決するぞ」

「おお、さすが悪魔だ。とても頼りになる言葉。」

俺は天使さんがそこらへんに置いていたラヴアーチャーを持って悪魔の胸に狙いをつけた。

「ほ、本当にいいんですね」

「言っておくがな、ラヴアーチャーの効力はすさまじいぞ。ちょっとでも心に隙があればその効力は半永久的だからな。このわたしを伴侶にするかどうか、後はお前しだ……うぐっ」

間違つて手を離してしまった。なんだか、ものすごく大切な説明をしている途中で矢から手を離してしまったようだ。

悪魔さんはしばらくの間荒い息を続けていたがなんとか立ち上がる。

「……………今日から、お前の伴侶となることを誓う」

「ええっ」

「あれ、蒼疾さん何を……………ま、まさか悪魔を」

絶望したかのように天使さんは俺のことを見ていた。

「え、だつてお前がラヴアーチャーの解除方法を教えてくれないからこんなことになったんだろっ」

「ひ、他人のせいにするんですかっ」

「いや、天使のせいになっているだけだから」

「おい、その下級天使」

「失礼ですね、なんなんですかっ」

電子レンジ内の悪魔にそう話しかける。見下すような視線だった。大人はな、時としてとても理不尽なことを耐えなきゃいけないんだ。天使よ、この男は本当にどうしようもない男だ」

「出会つてすぐにそう言われたくねえっ」

「…………それは認めますが」

「認めるなよっ。天使なんだからなんとか否定してくれ」

「ちよつと、黙っていてください」

俺のことをまるで下等生物でも見るかのような視線だった。

「夫よ、お前の名前は神埼蒼疾だな」

「ああ、そうですね」

「よし、何一つとして不足はないな。よかつたな、わたしの伴侶になれて」

悪魔と言つたら非常に怖いイメージがあるのだが目の前の悪魔からはそんなものは一切感じられなかった。

「あの、悪魔さん」

「なんだ」

「一つ、教えてほしいことがあるのですが、いいでしょうか」

「ああ、構わないぞ」

「なんで、悪魔の貴女が自己中心的な言葉を言わないのでしょうか
それは簡単だ。契約者が天使、悪魔の両方と契約しているのだから足して二で割った状態となっているのだからな」

「ああ、なるほど」

「そ・う・やささんっ。おやつ時間ですからお菓子を出してくださいさ

「いつ

……」

足して二で割って両方とも不通になったと思ったのだが天使さんだけ異常だった。おかしいぜ、この人。

悪魔さんに聞いてみると、どうやら力が強すぎて一時的な影響を受けているらしい。一時的ならなんとかなるだろう。

第四話：悪魔と屋上で

第四話

そろそろ朝のHRが始まる時間だが、まだ登校していない生徒は結構多い。俺のクラスはぎりぎりに入ってくる奴が多いからな。

「おはよ〜」

「おはよっ」

高校生だから高校に行かなくてはいけない。俺の両親は貧乏なのだがなんとかこうして高校に行かせてくれている。俺が小さいころからよく夜逃げという行為をたしなんでいらした。一番好きなものはお金、それが俺の両親の座右の銘である。

天使、悪魔なんて置いておくとして、以前俺はばあちゃんに『家がほしい』といったことがあった。それが今、こうして叶っているのかもしれないなとそう思っている。

「神崎、神崎、返事をしろ」

「え、あ、はい」

「朝からぼーっとするな」

「すみません」

いつの間に出席を取り出していたのかは分からないが、先生に注意されるほどぼーっとしているとは重症だ。俺はひとつ、ため息をついた。学校の俺はクールな存在。騒いだり、おくしたりしないで常にポーカーフェイス、それを今日まで心掛けてきたのだ。

「蒼疾、蒼疾」

「ん、ってうわああああ」

下から声が聞こえてくると思ったら制服の胸ポケットから悪魔さんが……悪魔さんが手を振っているではないかっ。

「おい、神崎、うるさいぞ」

「す、すみませんっ」

俺は周りからの冷たい視線をクールだから、なんとか耐えきった。

「もう、学校にいるときは話しかけないって約束だったじゃないですか」

「おい、それは間違っているぞ」

「はあ、どこが間違っていると言っんですか」

下から親指を突き付け、俺に言うのだった。

「ここは高等学校だ。お前の言う学校は曖昧すぎて対象外だぞ」

「検索機能のしょぼい機械ですかあんたはっ」

「いや、悪魔だ」

くっ、さらりとクールな顔で言われるとは思わなかった。俺よりもクールだ。そして、美しい。ああ、こんなお姉ちゃんがほしかった。

「大体、惚れた女を家に一人残そうとするなんて愛をわかってないな、お前は。まあ、あんな下級天使よりもわたしを選んだことは利口だな」

「まあ、それはそうですよ」

だって、あなたならたぶん、事故が起こらない限りばれないでしょうし、とは口が裂けても言えなかった。てつきり手のひらサイズはレンジから出てくれば終わるかと思っていたのにそうではなかったとはな。

「なななな、なんで身体が縛られているんですかっ。しかも、点滴

されている状態ですしつ。私は病人ですかっ」

家の天使さんは静かにしてくれているのだろうか。屋上でそのことを悪魔さんに尋ねると大きくうなずいてくれた。

「安心しろ、下級天使ごときがわたしの術を破ることなど出来ないだろう」

「はあ、まあ、確かにすごかったですからね」

たたみで眠っている天使さんを指パツチン一つで布団に縫い付け、栄養補給のために点滴までさせたのである。すごかった、この悪魔さんの腕前は。

「でも、意外ですよねえ。悪魔さんが天使さんにやさしくするなんて。悪魔と天使なんて敵同士かと思いましたよ」

「ん、そりゃあ、仕方がない。契約が成り立っている以上、天使と悪魔といえど手を取り合わねばいけないからな。使役されている者同士がけんかをしてしまえば不利益をこうむるのは使役者だ。契約を作ったものも馬鹿ではない、けんか両成敗という結果になっつまうからな。だから、手を取り合うのだ」

「……………」

悪魔が、悪魔が手を取り合うなんて絶対に言っちゃいけないと俺は思った。そして、けんか両成敗ってあれとけんかしたら悪魔さんは絶対に踏みつぶされて終わってしまうと俺は思う。

「まあ、蒼疾の言いたいことはわかるが残念ながら悪魔同士のほうが仲が悪いだろう」

「え、だって同じ種族じゃないですか」

「ふっ、それはお前ら人間のほうが知っているだろう。たとえば、同種族であっても仲良くなることなど難しい」

「……………」

そりゃそうだ。それなら歴史は平和的でこの世にパスポートなどというものは存在しなくていいだろう。馬鹿な俺はこの程度の考えしかできない。もっと頭がよければいい考えも浮かぶはずなんだけどな。

「悪魔はな、人間の苦しむ表情や困ったような表情が大好きだ。大人数が苦しんでいればそれだけ自分の幸せが増えるということになる。だが、他の悪魔もその人間の苦しむ表情は自分だけのものと思っっているんだ。実際、それは違うんだがな。悪魔は一人占めしたいとみんな思っている」

「はあ、なるほど」

ムードもへったくれもねえ。すっごくいい表情をして俺に笑いかけてくれた。

「だから、今度お前の一番いい表情をわたしに見せてくれ」

「か、考えておきます」

恥辱と苦痛に悶える様……どちらが悪魔さんの喜びをより多く引き立てるのだろうか。うう、契約なんて本当、やすやすとするもんじゃねえな。

「ふふ、そういった表情もまたすごく元気になるな」

「え」

気のせいだろうか、悪魔さんの身体が大きくなっているように見えた。

「お前はもつともつと、これから苦しんで生きていくのだろうか」

「あの、その言い方もすごくとげがあるように聞こえます」

「お前の苦しんだ表情、ぜひともわたしに見せてくれないか」

「…………… お好きにどうぞ」

「いい返事だ」

ああ、すごくさわやかに言ってくれているが俺の心の中の闇はどんどんひどくなっていくばかりである。

「人の不幸は蜜の味って言いますけど、あれって本当なんですかね」

「ああ、そりゃあ悪魔の世界じゃ毎年つかわれている言葉だな、うん。お前の困った表情、なかなか魅力的だったぞ」

「悪魔って意地悪なんですね」

「まあ、悪魔だからな」

なるほどな、それは仕方がない。俺はあっさりとな納得してしまった。いや、悪魔にそう言われたら誰だって言い返せないだろう。

買い物時、悪魔さんはこういった。

「肉が食べたい」

「はあ、わかりました」

そういうわけで鶏肉を買って帰ったのだが天使さんにこう言われた。

「無理です、私はお肉を食べれません」

「え、そうなのか」

「ええ、あの、お言葉ですが蒼疾さんは二ワトリや豚が包丁であることやこんなことをされているシーンを何十回も、ええ、それはもう、何十回も見せられたことはないんでしょうか」

「いや、あんなことってなんだよ」

「あんなことはあんなことですっ」

一生懸命説明しているが、俺の目には切腹をしている武士にしか見えなかった。

「ともかく、お肉は食べることができません」

「そうか、それなら仕方ないな」

ベジタリアンなら仕方がない。ニンジンとキャベツとかで野菜炒めを作ってやらないといけないな。

「蒼疾、わたしに任せておけ。包丁さばきを見せてやるっ」

「あの、持てるんですか」

「安心しろ」

身長、MGスケールの悪魔さん（黒いドレスVer）に包丁を持たせるのはどうかと思う。しかし、彼女がやる気を出してくれているならば手伝わせるのがいいのではないだろうか。せっかく俺が呼び出したというのだから使役しても問題ないはずだ。

「じゃあ、お願いしますね」

「私も負けませんっ。天界でつらく厳しい修行に耐えた私の料理の腕前、見せてあげますから」

「ああ、頼む……………」

「あ、間違えて包丁を蒼疾さんにさしてしまいましたっ」

「ぐふっ」

「あ、間違えて蒼疾さんが食材だと思ってしまいましたっ」

「がはっ」

「あ、間違えて蒼疾さんの顔に熱したフライパンを押しつけちゃいました」

「げほっ」

「天使さん、貴女は今日一人で家にいたのだからそんなに頑張らなくてもいいですよ。ゆっくりとテレビでも見ていてくださいな」

俺は天使さんの頭に手を置いて笑いかける。

「え、いいのですか」

「ええ、たまにはその疲れた翼を伸ばしなさい。ねえ、悪魔さん」
「ああ、わたしはそれで構わんぞ」

どんな種があるのかは知らないが包丁が宙に浮いていた。幻ではない、俺の視界には包丁が鶏肉をきれいに切っているのが見えるのだ。

「じゃあ、お言葉に甘えさせてもらいますね」

天使さんには全然不思議に見えなのかテレビのスイッチを押している。

「あ、蒼疾さんお茶を注いでください」

「ふてぶてしいな、おい」

まあ、こんなもの俺の安全に比べれば安いものだ。

「えっと、悪魔さん」

「ん、なんだ」

「……………」

口に鶏肉（生）を啜っていた。

「いえ、なんでもないです」

「そうか、それならいい」

つまみ食いつてやつだろうか。俺の知っているつまみ食いはせいぜい、火を通したものだだけだと思ったのだが考えが甘かったようだ。

その後、問題は特に起こらず、ご飯を食べ終えた。正直言うと、俺は特に何もしておらず悪魔さんがやってくれたのである。その後もまあ、いろいろとハプニングがあったのだがここでは割愛させてもらう。

第四話：悪魔と屋上で（後書き）

知っている人は知っていますがこの小説、打ち切っていたやつですね。当時の自分が何を思っていたのか知りませんが、続けることができるならば続けたほうが小説も喜ぶでしょう。休載にしてしまっただあっちの小説もどうにかしないとイケませんね。

「そりゃあ、添い寝をしてやったほうがいいだろうと思ったのだが
あいにく、この身体のままではお前に押しつぶされてしまうからな」
「ああ、なるほど、ありがとうございま………すとか言いませんよ」
肝臓の部分がとれており、布団の中ではさらに他の内臓がとれて
いた。あまりに怖かったので半身残して内臓をつけてやることにし
た。

「そついえば蒼疾さん、そんなことよりなんでこっちの黒いのは
敬語を使うのに私に対しては乱暴な物言いなんですか」

ちんまい身体で胸を張る。そのわきには骸骨さんがいまだにぶら
りと垂れ下がっており、朝から元気がないようだった。もし、骸骨
と人体模型が動くというならば俺はこの家を手放すかもしれない。

「そりゃあ、悪魔さんはどう見ても年上だからな。俺、年上には敬
語を使う主義なのよ」

見た目は小さいのだが、胸はしっかりと出ており、顔も大人びた
顔つきだ。

「わ、私だって五百歳は超えていますよっ」

「え、そうなのか」

「ええ、そうです」

頭の上からつま先まで。若々しいオーラでさらに、ひまわり印の
元気っ娘である。お肌のつや、張り、透明感ともにぴちぴちで身体
は凹凸が少ない。

「だから、敬語を使ってくださいっ」

胸を張られてそう言われた。ふむ、それならば仕方がないだろう。

「じゃあ、ベットのほうに戻りましょうね、おばあちゃん」

「だ、誰がおばあちゃんですかっ」

「だって、五百を超えるっておばあちゃんでしょうっ」

「そのやさしい目はやめてください。癩に障りますっ」

先に言っておくが、俺はけっして遊んではいけない。真面目である。

「おい、蒼疾。朝から馬鹿をやってないでわたしたちの名前を決め
てくれ」

「はあ、わかりました」

昨日の夜、飯を食べたのちに名前をきちんと決めてほしいと言われた。あっちでは名前がちゃんとあったらいいのだがそれはあちらの世界での話であり、こっちはこっちで名前が必要だという。

「真面目なものを頼みますよ」

天使、悪魔ということも考えてカタカナとかがいいのかと思ったのだが日本だから和名がいいだろうと言われた。

「最近の日本の親はエキセントリックですからね。当て字とか無茶なことをしたりしますから。その点、蒼疾さんには期待していますよ」

期待するだけの価値を俺に見出してくれたのだろう。安心してほしい、俺はしっかりと名前を付けている。

「そうだな、まだ時雨とか氷雨、零一に霧ノ助だったらセーフだろうけど」

どう考えても異質の名前が俺の耳に届く。俺だったら認めないね。「いや、それもアウトでしょうよ、悪魔さん。とりあえず、天使さんの名前は『白銀』、悪魔さんの名前は『黒金』ってことでお願いします」

二人とも嫌そうな顔をして俺をじーっと見ていた。だが、俺は気にしない。名前というものはとても大切だ。俺も一生懸命考えたのだ。白と黒、それだけだったら悲しいじゃないか。だから、シロガネ、クロガネという名前にしたのである。

「じゃあ、これからよろしくお願いします。白銀、黒金さん」

「ネーミングセンスを問います。もし、天界で裁判があつたら絶対に地獄落としてですよ」

「もし、蒼疾がわたしの伴侶でなければ今頃全身の血を抜いてオレンジジュースを流してやるどころだったぞ」

うん、二人にこんなに喜んでもらえるなんて俺、感激だな。あれ、涙が出てきちゃうよ。

「じゃあ、俺、朝食作ってきます。目玉焼きとレタスでいいですよ」

ね

「待ってください、名前のほうは譲歩してあげますが私、卵は駄目なんです」

「ええっ、そうなのですか、おばあちゃん」

「おば……敬語はもういいですからおばあちゃんって呼ばないでください」

「わかった」

交渉成立ってこういう時に使う言葉なのだろう。

人体模型を布団に残し、俺は台所へと向かう。俺の肩には黒金がつっており、白銀は後ろから歩いてきていた。

「あの、私も肩に乗りたいですけど」

「いや、どう考えても乗れないだろ。黒金さんのほうは小さいから肩に乗って大丈夫だけだよ」

「うむ、ここはわたしの場所だ。さあ、ゆけ、巨人よ」

「はい、黒金さん」

「小さくなったら肩に乗ってもいいんですね」

「ああ、いいぜ」

その後、ご飯を食べ終えて俺たちは学校に行く準備を始めたのだ。もちろん、白銀を連れていくことはできない。転校生とかそれ以前に、白銀の存在を俺の両親にばれてしまってはまずい。黒金さんのほうは引き出しや机の下、本棚の奥など、いろいろと隠せる場所があるからなんとかなるだろう。

ちやつちやと朝飯を準備している傍ら、白銀にそのことを注意しておくことにした。

「おい、白銀……」

「はい、なんですか」

一生懸命丸くなるうとしていた。

「何、してるんだ」

「小さくなっているんですよ」

そんなに肩に乗りたかったのだろうか。まあ、そんなことはどう

でもいい。

「もし、この家に誰かが来ても絶対に出るなよ」

「何ですか」

「よし、じゃあ俺の言うことをちゃんと聞いたらプリンを贈呈しよう」

「わかりました」

ふっふっふ、ここまでこいつに対してプリンが効果的だったとはな。これから先面倒なことはできるだけ白銀を使って…………

「おい、蒼疾」

「なんですか」

「わたしにはコーヒージェリーは出ないのか」

「は」

「だから、コーヒージェリーだ。わたしも人がここにきても絶対に来ないと約束しよう」

「は、はあ、わかりました」

「よし、今日の晩御飯の時に頼むぞ」

自ら買収しに来る人外の者がまだいるとは思わなかった。世界とは広いものである。

「じゃあ、俺と黒金さんは学校に行ってくるから」

「はい、何か用事があったら連絡してくださいね」

「ああ、わかつてる」

しっかりと電話の使い方は教えておいたのできちんと出てくれることだろう。

そう、俺は家から出るときそう考えていた。まさか、家のほうの白銀が問題を起こすのではなく全く俺とは関係のない第三者が問題を起こすとは……………さすがに、白銀も黒金さんもわからなかったに違いない。

第五話・白銀、黒金（後書き）

ついに次回はみんなの大好きそうなジャンルの女性が登場。一体、この小説のヒロインは誰なのか。

第六話：謎の生物との邂逅

第六話

黒金さんがばれることもなく、とくに授業中であてられてしどろもどろになることもなく、空から女の子が落ちてくるなんて絶対にありえない。

まあ、普通の日常を終えて俺は放課後、スーパーへと向かっていく。

「約束したコーヒーゼリーを忘れるんじゃないぞ」

「わかってますよ」

俺が今通っているところはたまに不審者がうろついていると聞くところだ。男を襲うなんて話は聞いたことがないので大丈夫だろうが、でも、白銀がもしも家から出た場合は一応あれも女の子だし……いや、頭に光のわっかか背中白い翼をもっている人物は十分不審者だな。通報されないように注意しておいたほうがいいだろう。

「おい、蒼疾」

「どうしたんですか」

まあ、黒金さんはこのサイズだからゴキブリか何かと間違われるぐらいだろう。だから注意しなくてもいい……

「向こうから子供が走ってきたぞ」

「え」

「うわああああん」

黒金さんが言った通り、子供が一人走ってきた。小学生の上級生といったところか。男の子、元気がよさそうである。

「ひぐっ」

「え、ええっ」

俺の後ろに隠れて震えている。見た目がキ大将なのになんでこんなに泣いているのだろうか。

「い、一体どうしたんだ」

「えぐつ、こ、怖いお姉ちゃんが……………」

「なるほど、変質者が……………」

黒金さんがそういうと俺に指示を出す。

「よし、子供はわたしが隠しておこう。お前はここにいて変質者がどういったやつか見ておくんだ」

「わかりました」

黒金さんが子供の上に飛ぶとあらまあ、不思議。あつという間に子供の姿が掻き消えた。ちなみに、黒金さんは近くの物陰に隠れている。

「来るぞっ」

「ど、どんな変質者なんだ」

ガキ大将風の子供は怖いお姉さんが来ると言っていた。俺はそれを見届けよう。大丈夫、こっちには黒金さんだっているのだから。

ヴーン、ヴーンヴゥヴゥヴーンッ

「え」

角を曲がってやってきたのは俺の通っている高校の女子制服を着た黒髪の女の子だった。だが、その手にはチェーンソーが握られており、うなりをあげている。

「すっごい変質者だーっ」

俺は叫んでしまった。そして、当然のように相手はこちらへとやってくる。瞳は泳いでいるわけでもなくしっかりとした力をもってして俺を見ている。目をそらしてはいけない、俺の本能がそう叫んでいた。

「ああ、ちよつとそこの君」

「へ、お、俺ですか」

「ああ、君以外に誰かいるのかい」

たぶん、貴女が追いかけていた小学生がいますとは言えなかった。これはガキ大将の子供でもおびえるな。

「で、俺に何か用ですか」

「ああ、そうだったそうだった。小学生を見かけなかったかな。あたしが公園で儀式をしているところを見てしまったんだ。あたしの友人のペレツペ星人は異様に恥ずかしがりやでな、だから、友達になってもらおうと思ったんだ」

すっごく怖い人だつ。ああ、春だからか。春だからこんな人が……と、ともかく、ここは穏便に話を終わらせないと俺の身が危険だ。

「え、えっと、お探しの小学生ならあちらのほうに走って行きまし
たよ」

「本当かあ、こちら辺からおいがするんだけど」

子供が隠れている空間あたりに顔を近づけようとするので俺はその間に入り込む。

「きつと、俺の匂いですよ」

「そうか、まあ、いい。わかった、ありがとう」

そういつて春の嵐は過ぎ去った。手なれたようにチェーンソーをうならせ始めたのが本当、怖かった。

「……………く、黒金さん、見ましたか」

「見たぞ」

「いやあ、すごい人でしたね」

悪魔がいるのなら本当にそのペレツペ星人とやらはいるかもしれないなと俺は思いながら黒金さんのほうを見る。

「よし、坊主。お前はもう帰っていいぞ」

「う、うん。ありがとうございました」

最近の生意気なガキでもちゃんとお礼は言うんだな。そう思いながら見送っていると非常に険しい表情で黒金さんは先ほどの危ない人が去っていたほうを見ていた。

「どうかしたんですか」

「そつだな。今日は家に帰ろう。白銀と蒼疾に話しておきたいことがある」

やけにシリアス顔だった。うん、というか、悪魔が帰ろうというのなら帰ったほうがいいのだろう。

「ただ今、白銀」

「お帰りなさい」

白銀は丸まっていた。白いボールだな。

「さて、早速話をしよう」

この屋根の下に住んでいる者たち、まあ、三人だけだが、テーブルについて黒金さんのほうを見る。

「一体、どうしたんですか」

白銀は理由がわからないようで俺のほうを見るが、当然、俺もわからない。

「白銀よ。実は本日の放課後、蒼疾が勇者と邂逅を果たしてしまっただ」

「え、ゆ、勇者って」

「そつだ、天界にも伝わっているであろうあの勇者の生まれ変わりだ」

白銀の身体が震え始めていた。どのくらいの揺れかというと一瞬だけ地震が来たんじゃないかと思わせるほどの揺れである。

「おい、お前大丈夫か」

「だだだだだ、大丈夫ですよ」

そういつてどこからかラヴアーチャーを取り出して身を低くする。

「く、来るならどこからでもいい、いいですよ。返り討ちにしますからっ」

目がやばかった。何か見えない幻覚に対して戦っているような感じの目だったりする。

「あ、あの、黒金さん。白銀がおかしいんですけど」

「いや、あれが当然だ。よし、お前にはしつかりと話しておこう。これはまだわたしが小さかった頃、魔王の身边を警護していたときだ」

「……………」

あえて、そこには突っ込まなかった。

「あの女の子が勇者の生まれ変わりだとか。その魔王を倒しに来たんですよね。魔王を倒したのなら別に問題なんて……………」

「違うんだ。やり方がひどかった」

「え」

「当初、やつ仲間がやってきたとき、その中に勇者の姿はなかった」

勇者不在のパーティー。一体、主人公はどこに行ったのだろうか。ああ、もしかしてその魔王が勇者だったとかいうオチなのか。

「え、えーっと、それでどうしたんですか」

「当然、魔王も気になって尋ねたのだが勇者は前日逃げ出したとか言ったのだ。噂ではどんな相手にも臆することなく、嬉々として立ち向かったと聞いていて魔王も喜んでいたのだがな」

「は」

嬉々として立ち向かっている時点で人格を問われると俺は思う。

「まあ、ともかく勇者がいないとしても魔王は自分に従わない勇者仲間たちを葬るために立ち上がった。だが、魔王が呪文を唱えた瞬間、勇者にかけていた呪いが発動した」

勇者は、呪いなんてかけないと思いますけど。

「簡単に言うならばその者たちを犠牲にして魔王を土に還そうとしたのだ。あれは怖かったな。その場の力をすべて消し去るというもので魔王も半身を失った」

「……………あ、あの、それって本当に勇者のやったことなんですか

ね。もしかしたら勇者を騙った別人が……」

「いや、勇者の姿が宙に現れてな。それはまあ、使い魔みたいなものだった。そいつは『まだ苦しみが足りていないようね』そいつで使い魔は爆発。読んで字のごとく死屍累々とした光景がわたしたちの前に広がったのだ。わたしはそのとき勇者が女だと初めて知ったよ。噂ではりっぱな男だと聞いていたからな」

「情報戦にも秀でていたんですね」

「ああ。ちなみに、当時聞かされていたその男は伝説の木の下の首だけ出ている状態で見つかったそうだ」

想像すらできない。そんな血なまぐさくて恐ろしい勇者がいたとは。

「えっと、それでその、勇者の仲間たちはどうなったんですか」

「ん、ああ、ちゃんと天界に召されたぞ」

「そ、そうですか」

「それで、次の日………牢屋に捕まえていた人間たちが一斉に逃げ出した。魔王もそれに気がついてその場に行ったのだが畏だったんだ。そこで魔王は消滅した。魔王から傷を治すための薬を採りに行くように言われたため、遅れてその場についたわたしたちが目にしたもの、それは勇者一人だった」

「え」

「捕虜にしていた人間たちごと、勇者は魔王を消滅させたのだ。ああ、安心していいが人間たちはその後わたしの力で復活させた」

それはよかった。というか、この黒金さんってやることあまり悪魔じゃないよな。

「その時、わたししか生き残れなかったのは仕方なかったことだ。生まれて初めて、悪魔が手を組むという光景を目にしたのだからな。勇者は天国に行くことなく、わたしたちの生まれ故郷である地獄へと逝った」

「そりゃあ、そうでしょうね」

そこまで残虐非道な勇者がいるとは………

「生まれ変わったとはいえ、あの気配……わたしは間違えないだろう。記憶も何もかもなくなっただけはいるが特殊な何かを持っているとわたしは思う。だから、蒼疾は近づかないほうがいいぞ」

「絶対に近づきません」

あんな変な奴に近づくとやつ顔を見てみたい。

「まあ、わたしと白銀がいれば何とかなるだろう。今の奴はしょせん人間だ」

「そ、そうですね。白銀と黒金さんがいれば大丈夫ですよ」

「ああ、大船に乗っていたつもりでいてくれ」

本当、黒金さんって頼りになる人だな。

「白銀、お前も頼りにしてるぜ」

「ええ、任せてください」

白旗を手に持って自信満々にうなづく白銀を見て俺は不安が隠せなかった。

第六話：謎の生物との邂逅（後書き）

さて、いかがだったでしょうか。彼女は勇者、名前はまだない。候補としては『電波 受信子』か『毒物 乱子』といったものがあがっています。っとまあ、暇つぶし程度で読んでいただけたら幸いですよ。ああ、出来たら感想よろしくお願いします。

第七話：深夜のチェーンソー

第七話

深夜一時ごろだろうか。なんだかチャイムの音が聞こえて目が覚めた。

「ん」

実際、それは幻聴などではなく俺の耳にしっかりと聞こえているものでどうやらこの遅い時間帯に誰か来たようである。不審に思いながら隣の布団に入っている白銀を起こすことにした。

「おい、おい、白銀」

「……………ゆ、勇者が……………すびい」

悪夢を見ているようで顔色が悪い。起こすのがかわいそうだったので今度は黒金さんの姿を探す。

「おい、蒼疾」

「え、黒金さん起きていたんですか」

「ああ」

目は赤く光っており、まがまがしいオーラが出ていた。ま、まあ、悪魔だから仕方がないかと割り切って一緒についてきてもらうことにする。どうも、怖くて一人で行く気になれないのだ。

「どうやら、勇者が来たようだな」

「は」

さらりと恐ろしいことを言われたような気がしたが、チャイムの音が戸をたたく音に変わっている。

「はいはい、今開けま……………」

ヴーン。

すりガラスの玄関が割れ、チェーンソーの刃が俺の前ぎりぎりまで迫ってきた。ああ、真つ二つにされてしまつと一瞬思ったが迫ってくるだけでそれ以上よつてはこない。

「……………」
し、死ぬかと思つたあ。

刃はぬかれて、割れた玄関から白装束の女が入ってくる。

「あれ、ここ君の家だつたんだ」

「ななな、な、あんた何がしたいんだつ」

「いや、ちよつとこれから山に登つて人形に五寸を打とうと思つてたらおなかすいてさあ。何か食べ物出してくれないかな」

うなりをあげ、無言のプレッシャーを俺にぶつけてくる。しかし、あいにくチェーンソーの言葉は理解ができないので無視だ。

「そ、そんなもの出すわけないだろ」

「強がつていても足は震えるもんなんだね」

にこにこ笑いながら近づいてくる。くっ、めちやくちや怖い。目がはるか遠くを見つめているような感じだし。

白銀に助けを求めようと思つたが、それはそれでかなりださいだろつし、解決してくれるとは到底考えられない。

「ふ、不法侵入で訴えるぞ」

「でも、それつて君が生きてないと訴えることなんてできないよね。ふふふ、おもしろいことを言う人だな」

目が、笑つていなかった。

チェーンソーを振り上げ、俺のほうへと迫ってくる。急いで逃げようとしたが怖くて足が動かなかった。

もう駄目だ。

目をつぶつてしばらく動かない。しかし、いつまでたつてもうな

り音が俺の頭上で止まったままだったりする。

「女、それ以上蒼疾をいじめるといふのならこのわたしが相手だ」

「へえ、しゃべるお人形か。君、おもしろいの持ってるね」

チエーンソーを受け止めていたのは約二十センチの剣。火花を散らしながら、黒いドレスをまとった黒金さんが俺のことを助けてくれたのだ。

「去れ、これ以上ここで暴れるというのならそれ相応の覚悟が必要だぞ」

「しょうがないな、わかったよ」

チエーンソーを放り出し、白装束の女は俺に背を向けた。

「君、名前は」

「え、お、俺か……俺の名前は蒼疾だ」

「そう、なるほど」

捨てたチエーンソーを捨てることなく、女は俺の家から出て行った。主を失ったチエーンソーは壁に刺さったまま稼働を止めていない。

「って、ちよつと待てよつ。これをどうにかしていけよつ」

「はあ、片付けえ。あのね、そんなものは君がするもんでしょ。あたしはこれからペレッツペ星人に会いに行かないといけないから。時期が時期だからね」

相変わらずおかしいことを言いながら俺の前から去って行った。

「行ったか」

「はあ、一体ぜんたいあいつは何なんだ」

「言っただろつ、あいつは勇者だ」

勇者は絶対にチエーンソーなんて使わない。そう、俺の心が叫んでる。

「しかし、蒼疾も愚かなことをしたな」

「え、何のことですか。さっきのあれに刃向かったことですか。まあ、男は時として勝てない戦いに……」

「いや、そうじゃなくて名前を教えるなんて自ら呪ってくれと言わんばかりじゃないか」

「…………え」

「自分の名前は大切なものだ。お前もそれをよく考えておくといい」

「じゃ、わたしは寝るからな」

だ、大丈夫だよな。別に、名前ぐらい。

しかし、黒金さんの言う言葉を俺は実感することになる。とても最悪な形で。

第七話：深夜のチェインソー（後書き）

次回、蒼疾の身に危険が迫る予定です。

第八話：命の重さと必殺技

第八話

「じゃあ、学校に行きましようか、黒金さん」

「そうだな」

いつものように俺の胸ポケットから顔を出してほほ笑むことなくクールな表情でそうおっしゃる。ああ、なんて見ていて心安らぐのだろうか。

「じゃ、行ってくるからな白銀」

俺は玄関を後にしようとして、白銀は俺を捕まえる。

「あの、蒼疾さん」

「なんだよ。遅刻しちまうだろ」

もしかして、出かけのキスなんてしてくれているのだろうかと桃色妄想暴走登校を想像するのだが、現実には厳しいものだった。

「これは一体、何ですか」

そう言っ指差しているものはチェーンソー。謎電波女が残して行った負の遺産である。触れたら呪いが襲いかかって毒電波を受信してしまうかもしれない。もしかしたら、地方掌握のために置いて行ったチェーンソー型アンテナなのかもしれないな。

「おいおい、これはな、チェーンソーと言っ木とか鉄とか様々なものをぶった切るんだよ」

「へえ、そうなんですかあ……っ。そうじゃなくて。私が言いたいのはなんでこんなところにチェーンソーが突き刺さっているんですかっ」

チェーンソーはいまだに元気に呻っており、床を傷つけまくっている。

「これ、止めないといけないんじゃないんですか」

「俺、このチェーンソー止めねえもん」

チェーンソーの操作方法を知っている高校二年生ってなかなかい

ないって思うんだ。うん、手足のように稼働させるなんてそれこそ小さいころから扱ってないと出来ない。

「というわけで、無視」

「それで結局、私が止めておけばいいんですよ」

「そうだな、頑張ってくれ」

親指をぐつとたてて俺と黒金さんは学校へと旅立ったのであった。

「いや、やっぱり待ってください」

「おい、そんなにひきとめるなよ。お前、絶対RPGで王様のお願いをいいえって連打しまくるタイプだろ」

「違いますよ、止め方がわからないんで教えてください。チェーンソーってどうやって止めるんですか」

「いや、さっきも知らないって言っただろ。黒金さん、わかりますか」

「ああ、まかせてくれ」

さすが黒金さん。この人に止められないものなんてないんだろうな、きつと。

「こうやって剣を突き刺せば止まるぞ。えい」

どこから出現させた剣を放り投げ、チェーンソーに突き刺す。機械のきしむ音が廊下中に響き渡り、絶命した。

「ほらな、止まったぞ」

「あの、それって壊したっていうんじゃないんですか」

白銀がそういうが、黒金さんは涼しい顔である。

「それならお前が止めればよかっただろ。お前が止められないと蒼疾に駄々をこねた、そしてわたしを蒼疾が頼ったからわたしは行動に移したまでだ」

まあ、そうである。たった一本の剣が刺さっただけだというのに部品などが粉々に砕け散っている為、どれほど黒金さんは力を持っているのだろうかといつい、垣間見てしまった。

「白銀、お前に残念な知らせだが蒼疾と勇者は出会ってしまった」

「え、本当ですか」

「ああ、本当だ」

二人の間に嫌な感じの空気が流れる。

「蒼疾さん」

「なんだ」

「あの、私天界に帰ります。帰してください」

詰め寄られるが俺はどうやって帰してやればいいのか分からなかった。

「白銀、お前、契約を途中で終わらせるとどうなるか知っているのか」

「え、知りませんよ」

「はあ、これだから勉強嫌いは困るんだ。というか、常識だろう」

「え、ええ、そ、そうでしたっけ。ちょっとド忘れしちゃいました、えへ」

「白銀、可愛くいつでも黒金さんには通用しないだろ」

「契約を途中で破棄した場合、最悪消滅だぞ」

「え」

絶対にこれは素で知らなかった顔だろうな。

「まあ、そのことを考えたうえで勇者から逃げたいというのなら蒼疾に頼むといい。わたしの伴侶は心優しい男だからきつと許してくれるだろう」

「あの、蒼疾さん」

白銀は何かを決心したかのように俺のほうへと顔を向ける。

「これから毎日プリンを買ってください。私の命が燃え尽きるその日まで」

「いや、無理に燃やさなくていいからな」

天使が不燃物なのか可燃物なのか知らないが、やっぱり、白銀も消滅するのはいやらしい。

学校へと向かう道。俺は一人ながら黒金さんという手のひらサイズの女性と話していた。

「あの勇者からは魔王の匂いがしたぞ」

「魔王の匂いつてなんですか」

「きつと、生まれ変わった魔王がこの人間界のどこかにいるのだから。しかも、勇者のすぐ近くに。気をつけておいたほうがいいぞ」
その魔王がどういった人なのか知らないが、気をつけようがないのではないかと考える。だって、流されるようにしてここまでやってきたのだからこれから無理して逆流してもいいことはないんじゃないのか、そう思えて仕方がない。

「それと、お前に命について教えておこうと思う」

「命ですか」

「ああ、悪魔の下つ端どもは軽々しく命を粗末に扱い、勝手に取り込むがそれはとても無茶な行為だ。人間の魂とそこに蠢くアリの魂の重さはどちらも同じ、しかし、誰もそれを認めないだろうし、生きている間は問題がない。ただ、問題なのは肉体が朽ちた後、魂だけとなった場合だ。それまで自分が殺してきた魂たちに追いかけてまわされる。恨みつらみ、さまざまな怨恨によって力を得た魂ほど強力だからな。生前悪魔だった者たちでさえ、人間一人の魂とは同等だ。上級悪魔はそれを知っている。殺さず人の苦しむ表情を楽しむが、人の魂を食らうことはほとんどない」

「じゃあ、偉い悪魔が人の魂を食べるときはどんな時ですか」
黒金さんは俺を見てはじめて笑った。

「それはな、最後まで信頼して死んでいったものの魂だ。恨みつらみなど抱かずに信頼という嘘くさく、この世で最ももろい言葉で結ばれたものの魂を食らい、強くなるのだ」

「……………そうなんですか」

「そうだ」

それ以降、チエーンソーのうなる音が聞こえてくるまで俺と黒金さんは無言だった。

曲がり角を曲がると、そこには頭に鉄の棒をつけた一人の少女がいた。

「あれ、また君か」

「またあんたか……」

「運命を感じるね」

「俺は絶望を感じる」

お互いに軽いジャブをぶつける。ちなみに俺が生意気な口をきけるのは黒金さんがいるからである。

「ま、昨日は悪かったと思ってるよ」

「悪びれもせずに自分の髪の毛を気にしながらさういう」

「嘘つけ、それならあのチエーンソーをどうにかしてくれ」

「それは駄目だよ。あたしのあれはマーキングだからさ」

なるほど、チエーンソーはマーキングだったのか。しかし、あれと壊れた扉がマーキングだというのなら俺の家を乗っ取る気満々という発言と取っていいのだろうか。

「女、人間のくせにあまり粹がるなよ。あまりわたしの蒼疾をいじめると少しばかり痛い目を見ることになるぞ」

俺の胸ポケットから黒金さんが顔を出してさういう。ああ、かっこいい……。

「ふん、よくいうねえ。それなら試してみるといいんじゃないかな」

「いいだろう、手加減はしてやるからあがいて見せよ、愚かなる人間よっ」

胸ポケットから魔王みたいな台詞を吐いた黒金さん。俺が気がついた時には既に相手の背後にいた。それに気がついた電波女はチエ

インソーを後ろに振り回したが、黒金さんはこれまたおらず、やつ
の鳩尾前に腕組みをして立って、いや、浮いていた。

「しまっ……………」

「必殺っ」

さすが黒金さん。しっかりと必殺技も持っていらっしゃるんです
ね。

「黒金パンチっ」

「名前ださっ」

晴天の五月、アスファルトにひざを屈する一人の女子生徒が目撃
されたそうだ。

第八話・命の重さと必殺技（後書き）

私が申し上げるとは特にありません。いずれ、黒金の他の必殺技を垣間見ることもあるでしょう。次回、魔王降臨予定です。感想、メッセージなど欲しています。

第九話：魔王

第九話

黒金さんは俺の肩に乗り、腕組みをしている。

「しょせん人間などこんなものだ。わたしの敵ではない」

電波女も気絶すれば静かなもので、アスファルトを枕に動かない。チエーンソーも再び黒金さんが剣を突き刺して壊してしまつたため、静かだ。

「あの、黒金さん……もしかしてやりすぎたのではないですか」

「蒼疾もそう思うか」

「そう思うかって……。」

「なかなかいい手ごたえを感じたな、うん」

「……………」
「悪魔の一撃をくらつたのだ。もしかして、このまま目覚めないってこともあるかもしれない。」

「蒼疾、まずは心臓が動いているか確認しろ」

「はい」

胸に耳を当ててみる。どうやら死んでいないようで本当に気絶しているようだった。

「蒼疾、お前……………」

「なんですか」

「妻の前で他の女の胸に顔をうずめるという行為が浮気に発展するということを知らないのかっ」

「……………あなたがやれとおっしゃったんでしょっ」

「む、そうだったな」

ともかく、ここらに置いておくわけにもいかないだろう。結局、背負って学校へと向かうことになったのである。当然、壊れたチエーンソーはそこに置いていくことにする。

授業中は静かなもので、俺のクラスの不良どもはしゃべるよりも眠るか、サボるかを選んでくれるのでうれしい限りだ。胸ポケットに潜んでいる黒金さんも、この静けさが好きなようで眠っているのが本当に静かだ。

「じゃあ、この問題を各自解いておけ」

高校生にもなって宿題かよと思ったのだが、どうせ自分ではやらないのだからこうやって宿題を出してもらったほうが成績は良くなるだろう。問題箇所をノートに写して午前中の授業も終わりを迎える。購買へパンを買いに行く連中はこれから戦いに放り出されるわけだ。

さつさと教科書をかばんにしまって弁当を食べようとしていると先生が再び教室へとやってきた。

「ああ、忘れるところだった。このクラスに神崎っているだろう。保健室に来てって連絡があったぞ」

「はあ、わかりました」

出していた弁当を戻して保健室を目指すことに。面倒だなとは思うのだが呼ばれているのならば行かなくてはいけないだろう。

購買へと必死な表情で向かっている歴戦の戦士たち。その横をひっそりと抜けながら保健室へと一步一步着実に向かっている。いつもと違ってとても暗いような雰囲気保健室に漂っている気がしてならず、正直言って扉を前にした心境は魔王の城を前にした勇者の気持ちである。

やっぱり、無視したほうがよかったかなと思ったころにはすでに決断が遅かったようでひとりで引き戸が開いた。

保健室にいるのはあの恐ろしいチェンソー女だけ。もし、あの女が俺のことを呼んでいるのならば襲いかかってくることは間違い

ないだろう。

自分の気のせいだと割り切って俺は保健室へと歩を進める。

「失礼します」

そういうと、引き戸はひとりでにしまり、あわてて出ようとしたが引き戸はびくともしなかった。

「しまった、扉が閉まったっ」

これが何かのドッキリだというのならばはつきりいつて性質が悪い。戻れないというのなら何があっても進むしかないため、俺は消毒液の匂いがする保健室を進む。白いカーテンで仕切られている場所にはあの女が寝ていることだろう。影が動いていないところをみるとしっかりと寝ているようだ。

「ぐぐぐぐぐぐ……」

しっかりといびきまでかいているから気にしなくてよさそうだ。

しかし、それなら誰が俺をここに呼んだのだろうか。

「よく来たわねえ」

「ひっ」

そちらのほうに神経が集中していたので隣から声をかけられたときは正直、心臓が止まってしまいかと思ってしまった。

声が出たほうにはパーマをかけ、小太り、サンダル履きの中年おばさんがおひとり様いるだけだった。先に言っておくが、この保健室の先生ではない。保健室の先生は男で、今日はいないそうである。女子に人気で一部男子からは恨みを買っているというすごい先生である。

「あ、あの、あなたは誰ですか」

「簡単に言うならそこで眠っている娘の母」

どこからどう見ても普通のおばさんで、電波な娘さんとは違うようである。てつきり、娘が電波なら家族も相当おかしな連中だろうと思っていたのだが意外と普通だった。

「そんなことよりあんたからミシエルの匂いがするんだけど一緒にいるのかい」

「ミシエルって誰ですか」

唐突にそう聞かれるが、当然、知らない。俺の知り合いの中にそんな外国人はいないし、親戚の中にも当然いない。そういえば、中学のころに外国から来た先生が一人いたがダニエルという名前だったしホームシックにかかって母国へと帰ったはずだ。

「ミシエルを知らないのかい。ああ、こっちではもう違う名前か」
一人納得し、うんうんうなずいている。

「ん、もう昼過ぎか」

そんな時、俺の胸ポケットから黒金さんが顔をのぞかせ、目の前のおばさんを驚いたような顔で見つめていた。

「ま、魔王っ」

「ええっ」

それが冗談や寝ぼけた言葉だったならばどれほど良かったことだろうか。しかし、現実に変な話が本当にあるもので、目の前のおばさんは本当に魔王だった。

「ミシエル、お前今はなんという名前だい」

「今は黒金だ。魔王よ、お前こそなんでこんなところにいるのだ」

黒金さんの質問に対して魔王と名乗った人物は笑っていた。

「今じゃ一児の母親なのよ。こんなバカ娘を拾ってきてくれた変人の顔を拝みたくてここまで呼んだの」

「なるほど、こっちじゃあの勇者の母親か。魔王、お前はそれで満足なのか。仮にもお前を殺した勇者だぞ」

「敵はミシエルがとってくれた。今の私は単なるおばさんなのよ」

「そうか、お前がそういうのならわたしは何も言わない」

「あんたこそ人間には絶対になびかないって言ってなかったかしら」
どこからどう見てもおばさんがそんなことを言う。黒金さんはそんなおばさんを見ながら言うのだった。

「時間が経てば考え方など変わるものだ」

「そうかい、それなら仕方ないね。神崎君、娘は神崎君にお熱だから気をつけないとねえ」

「え、お、お熱って……………」

もしかしてあのチェインソー女、俺のことを……………」

「勘違いも大概にしておいたほうがいいぞ。あの女、相当お前の首と胴体を切り離したいと見える」

「……………」

やっぱり、話はそっち方面に進むんですね。

「安心していいけどあの子は前世のような力を持ってない」

「でも、チェインソーを振り回したりしていますよ」

「それも人間ができる範囲さ」

よっこいしょという元魔王を見て俺はやっぱりおばさんにしか見えなかった。

「ま、あんたの名前の刻まれた藁人形をこの前ちらりと見かけたからあと一週間以内に見つけてどうにかしないとやばいだけは言うておくわね」

「え、それって……………」

「じゃあ、私はタイムサービスがあるから」

それだけ言うと、瞬時に消えてしまった。

「まだある程度の魔法は使えるようだな」

「魔王って便利ですね」

「そうだな」

「って、そんなことよりあと一週間以内に藁人形を見つけてどうにかしないとやばいって言ってましたよっ」

「そうだな、どうにかしないとな」

黒金さんは何かを思い出して懐かしんでいるようだった。それは結構なのだが、これからの未来も大切ではないのだろうか、とくに俺の未来についてどうにかしてほしい。

第九話：魔王（後書き）

こほん、この小説の問題点などをお待ちしております。他にも感想なんかをお待ちしておりますのでお気軽にお願いしたいと思います。

第十話：死神と藁人形

第十話

「蒼疾、わたしはちょっと出かけてくる」

「あ、お出かけっすか」

「ああ、日付が変わる前にはお前の布団の中にいるから安心しろ」
夕飯を作っている途中で黒金さんはどこかに行ってしまった。出かける少し前にチェーンソー女について、あれは後二日ほど目を覚まさないだろうと黒金さんは言っていた。まあ、強襲されないといいことは実にいいことだなと思えた。

「白銀、これをそこに並べてくれ」

「はい、わかりました」

黒金さんがいないために白銀と一緒に夕食となる。特にこれといった話題がないと思っただが、今一番重要な話題を白銀に提供する。

「白銀、あと一週間以内に俺の藁人形を見つけてどうにかしないといけないって魔王に言われた」

「へえ、魔王様に出会ったんですか」

そっちのほうに食いついてきたかと内心、俺って大切に思われていなんだなあと思いつつ、頷く。

「ああ、って、お前は勇者よりおびえないんだな」

魔王よりも恐ろしい勇者というのも道理かもな。だって、農民Aとかと種族的に違いはないのにやつつけちまうんだから人間兵器と考えていいかもしれない。

「だって、魔王様は元天使でしたから」

「え、そうなのか」

「ええ、神様に反抗した結果、悪魔に堕ちたんですよ。悪魔に堕ちたからといって考えなどは特に変わっていませんし、魔王になったのも一時の暇つぶしですよ」

「……………」

なんだか、天界とか魔界ってかなり適当で本当にすごいんだな、そう思えた。

少しの間なごやかな雰囲気の流れていたが、いきなりご飯を口に含んだ白銀が叫び始めたのである。

「って、今蒼疾さん、呪われているって言いませんでしたかっ」

俺の顔面にびっしりとしたであろう米粒をとりながらうなづく。
「そうだな、藁人形に名前とか刻まれている時点で呪われている」と確定しろっ」

「あ、あと一週間だって聞きましたけど」
お箸を静かに置いて俺は頷く。

「そうだ」
「何のんきにご飯なんて食べているんですかっ。天使としてこれは見逃せませんっ。急いで見つけましょっ」

何やら大慌てで準備を始めるがやつが持ってきたのはラヴァーチヤーだけだった。

「荷物って言ったらこれしかありませんね。あ、あとおやつを持っていかないか……」

「お前、本当に探す気あるのかよ」
うちの天使は本当に適当だな。これならまだ黒金さんのほうが頼りがいがあるし、大体あの本、天使を使役するとか書いていたが半端な能力しか持ってないし、正直役に立っていない気がしてならない。

「当然ですっ。さ、食べ終わりましたね、行きますよ」
こうして、食後の藁人形探しは始まったのだった。

藁人形があるのはどこか……すでに打ちつけられているならば森だろつということであの裏側にある山へと白銀と一緒に登る。分かれ道にさしかかり、片方は獣道、もう片方はけものすら通らないであろう小道であった。

「ここからはお互いにわかれて探しましょう。迷子になったな、私の顔が見たくなつた、そう思つた時は叫んでくださいね。私が飛んで助けに来ますから」

「おお、さすが天使」

後者のほうには突っ込みを入れないようにした。構つと相当漬け込みそんな性格をしているからな。

「お前の翼つててつきり飾りかと思つたけど見直したぜ」

「ふっふっふ、この翼は飾りじゃありませんからね」

そういつて白銀は森の中へとはいつて行つた。しかし、この見渡す限りの木から探さなくてはいけないのだから大変だよな。

一本ずつ丁寧に探しては日付が変わつてしまつたろう。しかし、適当に探しては見落とす可能性もある。

そんなことを考えていると急に頭の中に鐘をつくイメージが浮かんだ。

ふと、右を見ると首をつつた状態で女性がこちらへと突っ込んでくるではないか。それも一瞬で、彼女の膝が俺の額を思い切りたたく。きつと、ゲームだつたならばクリティカルヒットになつていたはずだ。

「ぐはっ」

俺の意識はあつという間に常世の闇へと引きずられていったのだつた。

「ん」

「大丈夫かしら」

目を覚ますと視界の先には一人の女性の顔があった。

「いたた、あの、あなたは」

「死神よ」

「へ」

病的なまでに肌の色は青白く、生気を感じることは確かにできない。首には首吊りのロープのようなものが途中から千切れてぶら下がっており、小粋なアクセサリーとはさすがに言えなかった。

「この世に悲観して死のうとそこの木の上から飛んだわけなの。そうしたらあなたがいきなり歩いてくるじゃない」

なるほど、それで俺にひざ蹴りをかましたというわけか。しかし、まさか自殺志願者のお姉さんと会うとは思わなかった。

これは厄介なことになったなと思いつつも、膝枕なんて生まれて初めてなので甘えている。きつと、俺って出会い系に登録したら騙される男なんだろうな。

「死神といつてもねえ、無理やり人の肉体をどうこうして連れて行くのも誘拐と変わりないから捕まっちゃうの。今回は特別に膝枕で介抱してあげたからあなたは生き返れたのよ」

「はあ、それはどうも」

話を聞いて理解した。何を言っているのかはさっぱりわからないし、確実に危ない人だろうということだけはわかった。理想のお姉さん系だが、ここは目をつぶってあきらめたほうがいいだろう。

しかし、考えようによつてはこういった人のほうが藁人形のある場所がどんなところなのか知っているのではないだろうか。

「すみません、ここらへんで藁人形を見かけませんでしたか」

「藁人形、ああ、そういえばかわいいお人形さんを拾ったわね。こ

れかしら」

ポケットから取り出したそれを見て俺は固まった。紙に俺の名前が書かれてそれを張り付けており、顔の部分に釘がめつた刺し。

「あら、この呪い通りになったわね。あなたの顔にひざ蹴りをしてしまったもの」

クスツと笑って俺のおでこを触る。ひやりとして居心地の悪い冷たさだった。

「神崎君、あなたがもしも死んだ場合、魂は安全に運んであげるから安心してね」

「は、はあ、ありがとうございます」

「さて、わたしはもう逝かないといけないからまたね」

そういってお姉さんは立ち上がると木を登り始めたが、途中で止まった。

「やめておきましょう、もしもまた、誰かにひざ蹴りをぶちかますなんてこと耐えられないわ。わたしのひざ、まだ痛いもの」

降りてきて今度は本当に夜の森を歩いて行ってしまった。

「あの人、本当に死神だったのか」

俺のつぶやきを聞いている者はだれもおらず、いたとしてもそれは藁人形だけだろう。

第十話：死神と藁人形（後書き）

ああ、またもや変な人が登場してしもうた。それに、いまだにチエーンソー女の名前も不明という緊急事態。次回こそはひと段落付けておいたほうがいいだろうなあと思う今日この頃。

第十一話：闇の招き手

第十一話

自称死神の女性に手渡された藁人形。正直、さっさとこんなものは処分したいのだが何分、処分方法などは分からなかったのとおりあえず白銀を頼ることにした。

「白銀 っ」

叫べば助けに来るといふ言葉を信じて叫んでみたものの、待てど暮らせどあの天使はやってこない。あの翼は飾りではないかもしれなかったがあいつの耳に届かなければ意味などないのだろう。

「あら、今私を呼ばなかったかしら」

そして、白銀の代わりにやってきたのは自称死神の女性である。

今度はしっかりと死神の代名詞でもある鎌をその手に携えており、黒いローブをまとっていた。しかし、先ほどの千切れたローブは首に相変わらずぶら下がっている。

「あ、いや、あなたを呼んだわけじゃないんです」

「あら、そうなの。駄目よ、こんなところで若い男がふらふらしていると死神に襲われちゃうわ」

あんただろっ。とは言えなかった。先ほどまでとは違って冷たい感じの空気が彼女を取り巻いていたし、俺を見る目がまるで、獲物を狙うチーターのそれとそっくりだった。

「ほら、よく車に乗ったりすると性格変わっちゃう人いるじゃない」

「え、まあ、聞いたことはありませんね」

何気ない会話の際に俺は逃げようと思える。相手を見据えたまま、後ずさっていき、隙を見て走ろうと考えた。

「私もね、鎌をもっちゃうと性格が変わっちゃうの。刈り取りたい、ああ、刈り取ってしまいたいと思ってね、困っちゃうって」

「あ、俺、失礼します」

さっさと回れ右をして走り出す。獣道だったが走る分には問題な

く、あまり舗装された道路から離れていなかったため、すぐさまアスファルトの道路へと逃げ延びることができた。ここまで来れば大丈夫、そう考えていた俺はどれほど愚かだっただろうか。

「待ちなさいっ」

「ぎゃーっ」

走るのではなく、滑りながらこちらへと襲いかかってきていた。速さがまず、人間のスピードとは違い、俺の二倍ほどのスピードだ。後ろを振り向いた瞬間、鎌が横にスイングされており、ひざ蹴りを食らったその時と同じように頭では分かっているのだが身体は動いてくれない。

目を閉じることなく見続けていた俺はその時、白銀の姿をとらえることができた。

「だ、大丈夫ですか」

「あ、ああ」

俺は無様に転んでしまい、死神と俺の間には白銀がいてその鎌を白い何かではじいていた。

「くっ、やはり天使がいたのね」

悔しそうに死神はつぶやいており、白銀のことをにらみつけている。

「し、死神が生きてる人間を襲うのは違反じゃないですか」

怖いのだろう、白銀の足はふるえていた。ちなみに、俺のほうは腰が砕けて動けない状態である。

「欲望の赴くままに刈り取るうとしただけよ。全部、この鎌が悪いの」

「じゃあ、その鎌を置いてください」

てつきり、いやだというものかと思ったのだが、死神はあっさりと鎌を放棄した。彼女が手を離れた瞬間、黒い煙のようなものをあげて鎌は消えてしまう。

「あゝ、死にたいわ」

「鎌をもつていようともつてなかりうと怖い人だな」

「鎌は没収です」

白銀がそういうと死神は俺のほうへと歩いてきていた。

「死にたくなったら私の名前を呼んでね。そうしたら一緒に逝きましよう」

「いやですっ」

「うふふ、待ってるわよ」

忽然と消えることなく、黒いローブをまとった女性は立ち上がるとアスファルトの道をはだして歩いて行った。完全に姿が消えると白銀が尻もちをつく。

「こ、怖かったあ」

「白銀、俺は初めてお前が格好良く見えたぜ」

「ははは、蒼疾さんって意外と情けないんですね」

二人して腰が抜けているために立つことができな。これからどうしようかとため息をついていると上から声がした。

「二人とも何をしているのだ」

「黒金さんっ」

上を見上げると漆黒のドレスをひるがえしながら黒金さんが降りてきていた。黒い下着が見えたとは言わないでおこう、何をされるかわかったものではない。

「実は死神に襲われたんです」

「死神に襲われたか」

いつもの淡々とした口調で黒金さんは俺の胸ポケットへと入りこむ。

「うむ、ここがやはりわたしの居場所だな」

「おかえりなさい」

黒金さんが帰ってくるとわかると人間とは強情なもので俺の腰も元に戻った。しかし、白銀はそもいかないうで腰が砕けて動けないため、俺が背負うこととなる。二本の足で三人分の体重を支えながら俺たちは家に帰ることになった。白銀、黒金さんの両方の体重を足しても十キロいかなんじゃないかと思うぐらい二人とも軽

く、ああ、やっぱり人間じゃないんだなと改めて認識させられた。黒金さんの体重はないに等しいと言っていていいな。

「死神を見たということは何かしら接点があったということなのだろう」

「死神と接点なんてありませんよ」

胸ポケットの黒金さんにそういうが、今日は後ろにもご意見番がいたりする。

「小さいころに九死に一生の経験をしていたり、何か病気をしていた場合、死神は寄ってきますよ。他に死神にとられないように死ぬのを待っているんです」

「死にかけた経験か」

考えてみるが思い当たらない。一生懸命考えていたのだが、黒金さんが咳払いをする。

「死神に目をつけられていたとは厄介だが、それよりも先に藁人形のほうをどうにかしないといけないな。二人とも探しに行っていたのだろう」

「はい、私のほうでは見つけることができませんでした」

「蒼疾はどうだった」

「ああ、ありましたよ。でも、死神に追いかけられている途中でどこかに落としてしまったようで持っていないません」

「ふむ、それもまたおかしな話だな。お前が持っていたという藁人形は本物なのか」

「さあ、死神から渡されたものですから」

「なるほどな」

黒金さんはそういうと黙り込んでしまった。背中のおねむの時間のようで寝息を立て始めている。

「ともかく、面倒なことになる前にわたしのほうでも何か手は打っておく。準備はすでに行っているのだが心苦しいことなんだ」

「えっと、何をするつもりなんですか」

「どうせ藁人形の二つや三つをどうにかしたところで元を絶たなく

では意味などない。あの女から電波な部分を消してしまおうと考えたのだ」

「すごいですね、それ」

「ああ、だがな、消してしまいたいところなのだが残念ながらそこまでの力を今のわたしは持っていない。他人に移すことしかできないのだ。電波のなくなつたあの女を説得するなりして考えを改めてもらい、電波を元に戻す。その間電波になるのは白銀が適任だろう」

「ええつ、いいんですか」

「いいも何も、お前の命には代えられないからな。それに、死神に出会つたということ自体が不吉だからな。不安要素は消し去つておきたい」

「白銀、おい、白銀」

白銀に説明しようとしたが、目を覚ましてくれなかった。

「よし、ではこれから儀式を行うぞ」

「え、今からですか」

「ああ、早いほうがお前のためにも、白銀のためにもあの女のためにもなるからな。だが、やはり今日中に行うのはやめておこう」

それだけ言つて静かに目を閉じた。どこかくたびれたような表情を黒金さんが見せたのである。おおよそ、疲れなど感じない人なのだろうかと思つていたのだがそうでもなかったようだ。

夜空に浮かぶ月は奇妙に明るいもので、見るものすべてを不安にさせるようだった。

第十一話：闇の招き手（後書き）

ああ、残念ながらこれまた名前をお披露目することもかなわなかった。

第十二話：電波天使と電波な勇者

第十二話

「あの、これは一体何の真似なんでしょう」

日曜日は基本的に高校は休みだ。そういうわけで、呪いの期日も明後日に控えた今日、黒金さんは儀式を決行したのである。儀式執行者の黒金さんはチェーンソー女を連れてくるため、今ここにはいない。

「いや、黒金さんがやれって言ったんだ」

家の広い庭に白銀を置いてそう言ってみた。まあ、嘘は付いていない。

「そんな嘘ばかり。もしかして私を縄で縛って遊ぼうって魂胆じゃないんですか」

「違うぞ、お前にはこれからこの電波女の電波を引き継いでもらうからな」

黒金さんが連れてきたのはあの電波女。こちらもこれまで身動きできないようにぎぢぎぢに鎖で縛られており、おまけに口にはしっかりとガムテープが施されていた。足と手にはそれぞれ蠢くような触手のようなもので縛られており、絶対に触りたくなかった。

「これまた偉く化粧させて連れてきましたね」

「ああ、イベントはしっかりと化粧させてやらないといけないだろうからな。白銀、お前もわたしが化粧をしてやったほうがよかったか」

「い、いえ、こっちの縄で十分です。蒼疾さん、ありがとうございます」

隣に乱暴に転がされたチェーンソー女を見ながら白銀はそういうのだった。

「蒼疾、お前に危害が及ぶとわたしとしては心苦しい。悪いことは言わないからこの場所が見えないところに避難しているといい」

「わかりました」

「あ、ちよ、ちよつとつ。私も連れて行ってくださいっ」

「それは無理な注文だな、白銀。なぜならお前はここでわたしの儀式の材料となるのだから」

「うわ、悪魔だ。俺はそうつぶやこうと思ったのだが命が惜しかったのでさっさと家の反対側へと逃げ出したのであった。」

「よし、蒼疾戻ってきていいぞ」

そんな声が聞こえてくる間、俺はずっとアリの巣を探して遊んでいた。意外とこれが楽しいなと思いだしたところに呼ばれたので少しだけ悲しかったがアリの巣に棒を突っ込んでやった。きっと、アリたちの歴史にも新たなページが刻まれたことだろう。

「えっと、結果はどうになりましたか」

「喜べ、想像以上に良くなったぞ」

黒金さんが指差す先には黒金、そしてチェインソー女が立っていた。片方は木刀をぶんぶん素振りしており、もう一人は何やら鉄の棒を青空へと向けている。

「まあ、見た目は変わってますね」

「ああ、効果てきめんだ」

話していると俺のことに気がついたようで俺の前へとやってくる。「そういえばまだ自己紹介がまだだったわね。って、なんで逃げようとしているの」

「い、いや、これは条件反射というやつだな」

「まあ、いいわ。神崎君、あたしの名前は佐藤日和っていうの。ひよりって呼んでね。将来の夢は勇者で、今のあたしなら他人の家に勝手に押し入ってタンスを勝手に開けたりつぼの中をのぞいて薬草

を借りることぐらい造作もないことだわ。これからよろしくね」

「あ、ああ。よろしくな」

俺は黒金さんを手招きする。

「どうだ、普通になっただろう」

「いや、まあ、確かにそうですねですけど残念ながら俺の普通と黒金さんの普通が違うものだということは理解ができませんでした」

やっぱり、人間と悪魔じゃ意思の疎通が不通なんですね、黒金さん。

魔王を倒すためにはレベルアップしなきゃと言い出した日和を無視して今度は白銀のほうへと視線を移す。

「ああ、ああ、素晴らしいぐらいに感じます。これが、これが大宇宙の意思………わかってます、私はしっかりと世界を守っています」
誰と話しているのか知らないが、頭にひと房のアホ毛が出来ていた。その髪の毛を押さえつけると振り払われる。

「ちよつと、蒼疾さんっ。今コンタクトをしている途中なんですから邪魔をしないでくださいっ。プリン異星人と意思疎通がとれないじゃないですか」

脳内に勝手に作りだされたプリン異星人とやらはどんな姿をしているのだろうか。ちよつとばかり想像してみたがまるでガキが考えるようなことしか浮かんでこないのだろうか。

「あのアホ毛、切ろうかな。まあ、あれはあれでかわいらしいから残しておいてやるか」

「そうか、それならわたしが代わりに切ろう」

そういつてどこからか剣を取り出して一閃。

「ああああっ。私のアンテナがっ」

「それ、アンテナだったんだ」

「ちよつと、黒金さんっ、何をするんですかつ」

「白銀、お前が蒼疾から可愛いと言ってもらえると簡単に思っつな」

まあ、これまたとてもおとめチックな考えですねえ。さて、そんなことよりこれは遊びでしているわけではないのだから黒金さんに

も不通に戻ってもらわねばなるまい。最近、不可思議現象に出会っている為にどうも一般人としての考え方から俺も相当ずれていつてしまっているようだな。

「ああつ、それは勇者が手にするエクスカリヴァーつ。貴女はもしかして歴代の勇者なのではありませんか」

「む、なんだ、寄るな、女」

「いえ、きつとこの方はあたしを魔王城へといざなつてくれる妖精さんに違いないつ。それに、白魔導士と遊び人もパーティーにいることだし、これならあの魔王城へ行くことができるつ」

白魔導士はまあ、白銀として遊び人つて俺のことかよつ。俺、遊び人に見えるだろうか。

「せめて賢者にしてくれ」

「蒼疾、女に引き込まれつつあるぞ」

「……………あの、ところで黒金さん」

「なんだ」

地面にひざをついて泣いている白銀の頭から降りてこちらへとやってくる。

「これからどうするんですか」

「そうだな、手段としては二つある。女に藁人形を探してもらつてわたしが消し去るか、女に呪いを解いてもらうかの二つだな。まあ、考えればもつと出てきそうなものだが呪いが施行されたところで蒼疾がカエルになるぐらいだ」

「ああ、なあんだ、その程度なんですか。よかつたよかつた」

「そうだな、お前がカエルになった場合はしつかり材料にしてやるから安心してくれ」

「それなら安心ですね、あはははは……………つて全然安心じゃありませんし、大事ですよつ」

「そうかあ、お前ならいい材料になれるとわたしは思っただけど……………な」

そんなに恥ずかしそうに言われたところで俺の考えは変わらない。

「手っ取り早い方法はその日和とかいった電波勇者に助けてもらいます。おーい、えっと、佐藤日和さん」

「……………」

無反応。何故だろうと考えた末に俺は手を打った。

「おーい、勇者様 っ」

「何、今あたしを呼んだかな」

目をキラキラさせながら寄ってきた。うわ、この人、電波がなくならうと痛い人には変わりないな。

「勇者様、先日俺を呪ったよな」

「まあ、確かに呪ったような……………それがどうかしたの」

「そりゃするさ。お願いだから呪いを解いてくれ」

「あ、それは無理。自称死神って人に譲渡しちゃったから」

「……………」

あれ、もしかしてやっぱり手渡された人形がそうだったのだろうか。

「まあ、どの道あれの解き方なんて今のあたしじゃできない。他の人の命を犠牲にしてまで君を助けるなんて……………」

そういつてよよよと泣き崩れていた。くっ、まさかかけた本人が泣き崩れるとは思わなかったな。

「ま、ともかくもう一度人形を探したほうがよさそうだな。安心しろ、人形さえ見つけることが出来れば……………ん、なんだあの城は」

黒金さんの視線の先にはまがまがしい紫色のオーラをまとった城が見えていた。俺の家は結構山のほうにあるために庭から町のほうが見えるのだ。とある家だけがかなりの存在感を持っており、西洋の城が脳内へと無理やり入ってくる感覚を覚える。

「あれはあたしの家っ。なんで、なんであたしの家が魔王の城になっっているの」

「……………」

あ、ああ。あんたの家ということはあのおばさんがいるということだな。

第十二話：電波天使と電波な勇者（後書き）

ああ、進みたくてもなかなか進めない。勝手に適当に書いて話を短くするのも手ですが、だからだと続けるのも好きなものでもう、なかなか、ね、進みませんがな。まあ、別に無理して進む必要なんてないのはわかっていませうとも。編集者もいなければ文句を言われることもありませうからね。

第十三話：魔王城への道のり

第十三話

より激しく木刀をぶんぶん唸らせる勇者。

「せいっ、せいっ」

気のせいだろうか………剣に風がまとっているように見えて家の庭にある木に傷が………入っているように見えた。

「今、着地地点を作っていますから。ええ、感度良好、着陸にはいいお天気ですよ」

そして、電波天使となってしまった白銀は家から醤油を持ってくとそれで円を作っていた。

そんな最中、黒金さんは静かに目を閉じて何かしら考えているように俺はこの不思議な空間から早く逃げ出したかった。

黒金さんはぽんと手を打った。

「よくよく考えてみればこの女の部屋に忍び込むのを忘れていたな」

「え、どういうことですか」

「女の部屋にもしかしたら解呪の方法があるかもしれないだろう」

「ああ、なるほどっ」

「どういった形式で行われたのかも知っておかねばならない。不本意ではあるが、あの魔王城に行かなくてはいけないだろう」

「はあ、わかりました」

きっと、世にも恐ろしい体験が俺を待ち構えているのだろうな。

勝手に呪われた挙句に呪いを解く方法への道のりが魔王城への道のりと交わるとは想像もしなかった。

「蒼疾、お前はあっちの女を説得して来い。わたしは白銀の説得をするからな。仲間が多いに越したことがない」

「了解しました」

知っているほうが説得しやすいかなと思ったのだが、地面に煮干しを埋め込んでいる時点でああ、もう、俺の知っている白銀ではな

いのだなとがっかりを覚えた。よって、魔王を倒すという使命感に燃えている勇者さんのほうがすばやく説得できるだろう。

「勇者様、あちらの妖精さんがいよいよ魔王城に行こうと言ったぞ」

「なるほど、とうとうあたしの出番かあ。よし、仕方ない、村人Aも仲間に加えてあげようじゃないか」

木刀を腰に携えて黒金さんのほうへと走って行った。

「……………村人Aって俺のことかよ」

遊び人よりはマシ……………じゃないかもな。いやいや、こういった脇役などもRPGを盛りたてるものなのだし、いい味を出しているのではないだろうか。

「おい、蒼疾」

「はっ、また危なく引き込まれるところだった」

「白銀を連れて行ってくれ」

そういつて指差す先には白銀が倒れていた。

「あの、説得……………したんですよね」

「ああ、しっかりと拳で語ってきたから安心してくれ」

もし、これからの人生で立て籠ったとしても、交渉人として絶対に黒金さんは選びたくない俺は思ったのだった。

「じゃあ、行きましようか」

白銀を背負って俺は黒金さんへと振り返る。

「こら、村人A」

「なんだよ」

「勇者が前を歩くのが普通だよ。君みたいな脇役はあたしの後ろをついてくるものなの。けっして理不尽かつ、無意味な動きをして仲間はそのに合わせなきゃいけないんだから」

そういつて日和は歩きだすのだった。まあ、自分の家へと向かっているのだから勇者云々より、そっちのほうが確かに正しいだろうな。

「でも、木刀なんかあの魔王を倒せるんでしょうか」

黒金さんのほうを見るとどうでもよさそうだった。

「倒せるかどうかはともかく、儀式が予想以上に成功してしまったため勇者としての力を取り戻している。何も装備してなくても魔王と対等に戦えるのはわたしが保障しよう」

レベルMAXとなった勇者はどんなにへばい武器でも魔王を倒したりできる。俺は以前やっていたRPGを思い出して震えていた。

「ともかく、あの女の目的が魔王を倒すことだったとしてもわたしたちには関係のないことだ。わたしたちがやることは女の部屋に忍び込んで呪いを解く方法を探すことだからな」

「あ、そうでしたね」

危うく俺も魔王を倒そうと考えているあの日和に引き込まれるところだった。

「ちなみに言っておくが、お前の能力では魔王にかなうどころか消し炭にされてしまうぞ」

わかっていることなのだが、なんだか心にぐさつと来るような言葉だった。

「ああ、蒼疾さん、あそこにプリン異星人のライバルであるペレッツペ星人が……」

気絶しながらも意味のわからないことを口走る白銀。今、彼女は幸せなのだろうか。

魔王城へと向かう道中、おかしな輩は一切おらず………というかどうか見ても俺たちのほうがおかしな連中に見えていたことだろう。腰に木刀を携えた女、そしてその後ろには見た目コスプレをした少女を背負っている男がいるのだから。

おばさん達がひそひそと話すのを見ながら『ああ、ここらにはも

「出来ること出来ないだろうな」と俺は考えていた。

「さて、ついた。ここに来るまで実に長い長いみちのりだった」

「そうだろうな、周りのおばさんのかわいそうなものを見る目、そして痛いやつらを見る目が正直俺の心を粉々にしてくれたぞ………
つて、うわぁ、よくもまあ、こんな違和感バリバリの城が出来たもんだよな」

「なんと言ったらいいのだろう。近づいて気がついたのだが一階部分は和風の日本家屋で二階以降が中世のお城風味だった。しかも、いちばん上のとんがりはアラビアンっぽいもっこりで、近くにはまるでう　このようなどぐる状態の屋根もある。」

「あのおばさんを初めて見たとき普通の人だと思ったのは大いに間違っていた、俺はそう思えて仕方がない。やはり、ゲームの中の魔王たちが普通にいいデザイン指向を持っているだけであつて（たとえ、トイレやら魔王の部屋がなかるうと）あんな格好いい城が出来上がるのだろうか。しかし、実際はめっちゃくちゃなものが出来上がるのだ。」

「蒼疾、魔王は勇者であるあの女に任せることにしよう」

「わかりました」

「家の中に入ったらすぐにわかれて魔王を探そうというのだぞ」

「黒金さんからのアドバイスをもらい、玄関を開けて俺は勇者の背中に話しかける。」

「なあ、魔王をてつとり早く見つけるために二手に分かれよう………」

「…」

「ぜ、そう言おうとして俺は目の前を凝視した。」

「よよよよよ、くくくくく、来たな、勇者、そして仲間たちよ」

「そこにはマッサージチェアのひじ掛けに頼杖をついているあのおばさんがいたのだった。しかも、小刻みに震えている為顔の肉が震えている。」

「そ、そんな、あたしのお母さんが魔王だったなんて」

「がっくりと膝をつく日和。そして、魔王は笑いながら言うのだっ

た。

「ちなみに名前は佐藤MAOです」

「どうでもいい……………」

俺のつぶやきなどMAOさんには聞こえていないようで彼女は立ち上がった。

「さて、愚かな勇者とその仲間たちよ……………私の仲間になるというのなら私の経営している会社の株券を半分やろう。」

「うわぁ、なんだかリアルで怪しい匂いぶんぶんの申し出だった。」

「わかった、お母さん。愚かなる勇者の仲間よ、お前らは付いてくるな」

「勇者様が早速的側に寝返ったっ」

「はっは、勇者よ、残念ながらその会社の株券はすでに紙切れ同然だ」

「何っ」

「おい、蒼疾」

「なんですか」

「馬鹿をやっていないで部屋を探すぞ」

「あ、すみません」

馬鹿をやっている母と娘を無視して俺と黒金さん、そして気絶している白銀は日和の部屋を探すことにしたのだった。

第十三話：魔王城への道のり（後書き）

ああ、なぜかわからないけど魔王城へとやってきてしまった。しかし、やってきたのなら普通の魔王城も面白くないだろう。結果、ひどく安定感のないカオスな城が出来上がったというわけなのです。面白い、面白くないは関係ありません。作者の気合が続く限りこの小説も続きます。もしかしたら、途中で失速、消息を絶って黒歴史となる可能性もありますけどね。

第十四話：真っ赤な部屋と犬、死神

第十四話

玄関から通じる廊下は魔王と勇者の死闘が行われている。通りた
いならば別の道から行かなくてはいけない。奥のほうに見える階段
も当然、別の道から行かなくてはいけないということになる。

玄関右手の廊下を歩くと、徐々に奥に行くほど不思議なお札やら
甲骨文字のようなものが刻まれている。

「うわあ、わっかかりやすいなあ」

この廊下の奥に何があるのか大体、想像できた。

はたして、俺たちの行きついた先には『日和の部屋』と言わんば
かりのお札が扉に一部の隙もなく張られているのだった。何を考え
ているのかは知らないし、知らうとも思わないが、右手側には宇宙
人のグレイ型の人形、反対側には日本人形が鎮座、扉の真ん中には
藁人形が天地逆さまに張り付けられていたりする。

「あの、怖くて入れないんですけど」

「おお、まさしくこれは全宇宙人に向けての地球アピールっ」

一人、電波を受信してしまった天使様がそういえば、後ろにおら
れたなあ。

白銀は意気揚々と扉を開けたのだった。

「ひっ」

俺の口から勝手に悲鳴が零れ落ちた。

部屋の中はこれまた恐ろしい………というよりも、めちゃくちゃ
だった。いや、藁人形があるとか、呪いの本が部屋に散らばってい
るなどではなく部屋は一面真っ赤。椅子も、ベッドも、机も本棚の
本もすべて真っ赤なのだ。他の色が存在していることはなく、これ
ほど掃除されている部屋も珍しい。

「蒼疾、電気をつけてみる」

「はい」

黒金さんに言われて部屋の電気をつけるとこれまた真っ赤なのだ。熱血野郎の部屋でもここまで燃えている部屋はないだろうな。

「ああ、やはり深紅は辛苦とつながっていて美しい部屋です……」
「うつとりと部屋や椅子、ベッドに次々と触っていく白銀。この部屋に唯一生える白色の服だったが、それらも今では赤いライトに照らされて真っ赤に染まっている。」

「なんだか目がちかちかする部屋だな」

「ええ、こんなところに十分でもいたら吐き気をもよおしそうですよ」

「その前にさつさと解呪に関係する何かを見つけないといけないな」
早速本棚のほうへと歩を進めようとしたが、俺たちの前に白銀が立ちほだかる。

「なんだ、どうした」

「待ってください、この部屋は非常に神聖かつ、他人が土足で立ち入っていい場所ではありません」

「はあ、お前何言ってるんだよ」

電波的なことを言っているために俺には理解ができない。

「天界ではオペレーターをやっていたため、あまり戦闘は得意ではありませんが……私の警告を無視してなお、この部屋を荒らそうというのなら許しません」

白銀の右手には光が集結されていく。それは見る者の心をすつきりとさせるような光だったが、黒金さんは不機嫌そうな表情へと変わっていった。

「ちっ、まさか電波天使がここでしゃしゃり出てくるとは思わなかったな」

黒金さんはいらいらとした調子で白銀のことをにらみつけるがまったく通用していないようだった。

「まったく、普段はぐうたらしているくせして変なところを出しゃばるから面倒な奴だ」

「そうですね」

「しかしまあ、わたしがまいた種だ。眼が出る前に摘み取らせてもらおう」

長髪を風に遊ばせ、黒金さんは宙に浮く。右手をふるうとそこには短い彼女にあった長さの剣が現れる。

「蒼疾、わたしが白銀を昇天させる前に結論を出すんだな。手加減なんてしないから十分なんて長い時間、お前にくれてやることはできないぞ」

「わかりました」

きつと、黒金さんは冗談なんて言わない人だろう。その目は死神が俺を襲ってきたときと同じように冷たく、獲物を狙う瞳だった。そして、もう一人の白銀のほうは目の焦点が合っていない。この謎空間でさらに悪い電波を受信してしまったようです。

「はい、はははは、大宇宙さまばんざーいっ」

もはや、白銀であって白銀でない。ああ、俺の知っている白銀は遠い宇宙に連れさらわれてしまったようだ。洗脳プレイというやつなんだろうか。

本棚へと向かう途中、誰かに肩を叩かれる。日和、そしてその母親ではないだろう。まだ廊下のほうから声が聞こえてくる。

「ここで何してるのかしら」

「って、死神っ」

白いワンピース、青白い肌、そして首にぶら下がっている危険なおいがポンポンする茶色いロープ……鎌を持つと狂暴な化け物へと変身する魅惑の女性がそこにいたのだ。

「鎌は持ってませんよね」

「ええ、あの天使に取り上げられたままだからずっと死のうと頑張っていたのよ」

さわやかに笑われてしまったが死ぬなんて物騒なことを言われたためにどきつとした。

「あの、死ぬとか軽々しく口に出さないで下さいよ」

「あら、確かにそうねえ。物騒ね。じゃあ、逝こうと思ったんだけ

どなかなか逝けなくてね。一旦、家に帰ってきたの」
そういつてにこつと笑う。

「え、ここ貴女の家だったんですか」

「ん、まあ、下宿先なんだけどね。魔王様が許可してくださったのよ」

まあ、魔王と死神ってなんとなくつながってそうだしなあ。

「ところでこつて日和ちゃんの部屋でしょう。なんで勝手に入っているのかしら」

「実は、藁人形の呪いを解く為にここにいますよ」

「へえ、そうなんだ」

かなり他人事みたいに軽くつぶやかれた。どうでもいい、そんなことより一緒に屋上から飛ばないかと目が俺を誘っている。

「あ、そういえばこれ忘れ物」

「え」

死神から手渡された禍々しいオーラを纏う藁人形。前より湿っており、右腕などが欠損していた。

「あの、なんでわざわざ俺に渡してくれたんですか」

「死神ってね、何かその人に関係するものがあればその人物にたどりつくことが出来るのよ。忘れ物は届けてあげなきゃ」

「へえ、なんだか犬みたいですね……ね」

言った後にしまったと思った。俺の人生、終わってもうたと誰かが俺の耳元で囁いた気がした。

「うふ、お姉さんを捕まえて犬みたいだなんて意外と特殊なプレイを毎日妄想しているのね」

「え、ええっ」

首元のロープを俺に無理やり持たせて死神はこういった。

「わんっ」

「……………」

「なあってね、ま、もしも私が鎌を持つている状態でさっきみたいなことを言ったらどうなるか……………わかるわよね」

「今後、そういった発言がないように努力します」

「よろしい、じゃあ私は自分の部屋に行くから」

くっ、危なかった……………容姿だけ見ると俺のストライクゾーンにどんぴしゃだから……………本当、怖いお姉さんだ。

「蒼疾、鼻の下が伸びているぞ」

「え」

気がつけば俺の隣には白銀をさっさとノックアウトした黒金さんが立っていた。白銀は動こうともせず悶絶しており、違う意味で天国を見ているのかもしれない。

「わたしでは不満か」

「い、いえ、そういうわけじゃありませんよ。すつごく魅力的です、はい」

「ふん、そうか」

怒っているようだ、もう、すつごく怖い。黒いオーラがにじみ出ているし、白銀は助けに来てくれる以前にやられている。

「あ、あの、これ藁人形です」

「そんなものはわかってるっ」

そういつて自分と同じぐらいの藁人形を憎々しげに宙に浮かべ、剣で突き刺す。すると、五寸釘もろとも霧消し、俺は真っ赤な部屋の天井をぼけっとみていた。

「帰るぞ」

「え、あ、はい」

白銀を担ぎ、俺は真っ赤な部屋を後にして、家に帰るのだった。

第十四話：真っ赤な部屋と犬、死神（後書き）

まあ、サルベージして気が付いてみれば十四話目。最初、この小説をお気に入り登録してくれた方の名前はさっぱりわかりませんがここでお礼を申し上げておこうと思います。ありがとうございます。え〜では、これからも気が付いたら更新していたというまるで影のような小説になれるように一層努力していきますのであ、これ以上おかしな小説はついていけないなと思った時は遠慮なく読むのをやめていってくださいね。

第十五話：知らぬ事は愚か

第十五話

魔王と戦っていた日和を無理やり連れて帰り、儀式を終える。そして、黒金さんは気絶させたまま日和を再び魔王城へと放り込んできたらしい。

白銀はまるで夢を見ていたような感じだった。

「あの、言っても信じてくれないというか、危ない人を見るような目で私を見るかもしれません」

「なんだよ」

「実は、あの電波勇者の言っていることが正しいことなんじゃないかなって考えて行動する夢を見たんです」

俺も悪い奴ではない。

「そうか、まあ、日々を過ごしていればそんなことを考える日もあるかもしれないな」

こうして、藁人形のくだらない事件は幕を閉じたのである。

六月、梅雨時。家へと続く坂道を俺と黒金さんは傘をさしてのぼっていた。

「なあ、蒼疾」

「なんですか」

「あの蔵は何だ」

指差す先は白銀、そして黒金さんを召喚するきつかけとなった蔵があった。

「ああ、あれは俺の祖父母の遺した蔵です。中は図書館みたいにな

っているんですよ」

「そうか、中に私を入れてくれないか。ここ最近あわただしく面倒事が続いていたがそれもひと段落ついたからな。ちょっとおかしいと思っていたことを確認したいんだ」

「え、鍵は開いていますから別に勝手に入っても……………」

「それがな、意外と強固な結界が張られていて中にいけないんだ」
珍しく手詰まりだと黒金さんは嘆息した。しかし、あそこにそんな結界なんてあったらどうか。

「ほら、あれが言っていた結界だ」

「……………」

どこからどう見ても野良猫撃退のために置かれている水の入ったペットボトルだった。あんなものが結界なんだろうか。

「その目は信じてないな」

「いえ、まあ、その……………ともかく、図書館の中に入れていいんですよね」

「ああ、そうだ」

「じゃあ、あの結界をどければいいんですか」

「いや、お前がこのまま入ってくればそれでいい」

ま、黒金さんには普段からお世話になっているのだからそういった願い事ぐらい簡単に叶えてやる事が出来るだろう。

俺は蔵の扉を開けてその中へと入ったのだった。もちろん、ペットボトルの結界は俺には通用しなかった。

「じゃあ、晩飯が出来たら呼びますね」

「ああ、よろしく頼む」

近くの分厚い本に飛んでいき、それを引っ張って出していた。この書庫はこの国が知らない文字で書かれているものが大多数のため、俺にとってこの蔵はもはや必要のないものと化していた。だって、下手につついてこれ以上悪魔とか天使などをふやされても困るのだ。

悪魔や天使に味噌汁が合うものかどうかはさておき、基本的に白銀と黒金さんは出てきたものは平らげてくれる。

今日も味噌汁をいつものように作っていると黒金さんが叫びながらやってきた。

「白銀 っ」

珍しく、白銀を探しているようだ。

「白銀は俺の部屋で本を呼んでいましたよ」

ちなみに、黒金さんが読むような知的なものではなくマンガだ。

あの天使、最近外出を覚えたようで、俺にお小遣いをせびっては古本を大量に買ってくるのである。おかげで俺の部屋はちょっとした漫画喫茶に早変わり。

「蒼疾、お前……………」

「なんですか」

やたらと怖い表情で俺を見てくる。何故、怒っているのかさっぱり分からない。

「どうかしたんですか。人の名前を軽々しく呼んで……………」

白銀があくびをしながら出てくる。髪もぼさぼさで、引きこもり一歩手前のような生活を送っているのである。

「白銀っ、お前ちょっとこっちに来いっ」

「へ、え、な、なんなんですか」

あらまあ、不思議。どんな種になっているのか知らないが黒金さんが手招きするだけで白銀の体は宙に浮き、あっという間に手招きした主のところまで引つ張られていた。

「蒼疾、少ししたら帰ってくる」

「はあ、いつてらっしやい」

俺は首をかしげながらも、二人が帰ってきたときすぐに夕飯を食

べれるように食卓へと料理を運ぶのだった。

そして、十分後。

「そ、蒼疾様、ただ今戻りましたっ」

「はあ、おい、白銀。どうかしたのかよ」

「い、いえっ、何もしておりませんっ」

顔に汗をだらだらと流しながら俺に敬礼している。ミリタリーごっこか何かだろうか。

「わ、私白銀はこれまで『蒼疾さん、おなかがすきましたっ』とか『蒼疾さん、冷えた牛乳とプリンを持ってきてください、ないなら買ってきてください』とばしりにつかってすいませんでしたっ」

「おい、頭を打ったのかよ。そんなことよりさっさと席について飯を食ってくれ。茶碗が洗えないだろ」

「了解しましたっ」

そういつてあわただしく座る。白銀の後には黒金さんが暗い表情でやってきた。

「あの、どうかしたんですか」

「いや、何もない。気にするな」

そういつて黒金さんも席へとつく。俺一人、なんだか蚊帳の外に出されているようだ。

「……………」

「……………」

「……………」

誰一人として会話をする人はいない。珍しく白銀がテレビの電源をつけないため、テレビも無言だ。

無言に耐えられなくなった俺は話題を提供することにした。

「あ、そういえば俺って人間ですけどなんだか特別なんですかね。」

だって、白銀はともかく、こんなに強い黒金さんを召喚出来たんですから……………」

ガチャン、ドカツ、ぱたり……………

白銀が椅子からこけてそのまま倒れた。

「おい、大丈夫かよ」

「はははははいつ、大丈夫です」

「ほら、掴まれ」

手を差し伸べるが、何故だか首をぶんぶん振っていた。

「滅相もございませんっ。この白銀、自分でしっかり立ってますから心配しないで下さい」

てつきり、俺が白銀のことを馬鹿にしたことに対しての意趣変えしたいやがらせかと思ったのだが、違うようだった。

俺はその時、黒金さんが険しい表情で見ていることに気がつかなかった。

第十五話：知らぬ事は愚か（後書き）

ふんふん、新しい章に突入です。まさか、こんなちゃんとした筋書き書いて小説書くななんて日が来るなんて思わなかった……。面白、面白くないは問わず、誰か感想を書いてほしい。喉から手が出るほど感想がほしい。お金と感想、どっちを取るかといわれるとそりゃあ……。ともかく、感想がほしい。あ、そういえば今日、二千円拾いました。あとがきがかなり適当なのは仕方ないな、そういうことで許してくださいね。

第十六話：強襲、チェインソー日和

第十六話

基本的に黒金さんは俺と行動を共にしている。何故、いつも行動を共にしてくれえているのかはわからないが、あのチェインソー女、佐藤日和の襲撃に備えて一緒にいてくれると俺は考えていたりする。しかし、黒金さんも常に一緒にいたりしないので当然、俺から離れることがある。そんな時は白銀と一緒にいてくれるのだが雨が土砂降りの梅雨のある日、二人とも出かけてしまったようだった。

恨みを晴らすかのように地面へと振り続ける雨。雨の音は俺一人しかない家の内部にも当然聞こえるし、うるさくて仕方がない。特に何かをしようとも思わなかったため、仕方がないので勉強でもしようと思つて自室を開けようとする。すると雨の音に混じってなんだか久しぶりに聞くような音……

ヴウ……………ン

それは、聞く者を不安にさせるような音だった。

ヴウーン、ヴウー……ン

チェインソーの唸り声だと気がついた時には既に遅く、窓ガラスを破って一人の女子高生がやってくる。まるで血のようなワンピースに、真っ赤なチェインソー……。雨をもともせずやってきたおかげでワンピースは透けて、下着を確認することが出来た。って、

俺は何を考えているんだっ。

「久しぶりだね」

「ひ、日和っ。お前、何しに来たんだよ」

「呼び捨てなんかにしないでよ、馴れ馴れしいっ」

チエーンソーを振り上げて襲いかかってくる。改良されているのかわからないが、やつを持つているチエーンソーは以前より小回りが利くように小さくなっているようだ。

当然、けんかの心得や超接近戦、CQCなど使えない俺は回れ右をして屋外へと逃亡することにする。黒金さんがいない今、俺が出来ることは逃げて、逃げて、逃げ続けるだけだ。

勝てない相手に挑戦するのも男の浪漫だが、浪漫と命を天秤にかけるとどうしても命のほうが重くなったりするわけなのだよ。

走るほうにも余裕があるのか、家を出るときに後ろを振り返るとにやけたつらで俺のことを日和は見ている。まあ、もしかしたら見逃してくれるかもしれないと思って走っていると、街へと続く途中の何も無い空間に俺はいきなりぶつかかった。

「いたたたた……」

発泡スチロールみたいな感じの壁にぶつかかったのだ。しかし、向こう側の景色はしっかりと目に見えている。

不思議に思っつてその空間に手をくっつけてみるとやはり、何か見えない壁があった。

「無駄だよ、そこには結界を張っているから」

結界と言われてペットボトルの結界が頭に浮かんだがこいつがする結界とはそういったものではないだろうな。

「四方に結界用の藁人形、そしてその藁人形を守るために結界を張っているから合計、十二体も使ったんだ。ここまで本気を出さないと魔王は倒せないからね。あ、言っておくけど内側からじゃ絶対に壊せないから」

にこつとほほ笑みながら近寄ってくる。ちなみに、結界がどういった形をしているのかわかるだろうか。紙とペンを準備して………

「さあ、ペレッツペ星人の名のもとに魔王にさばきを食らわせよう
っ」
紙とペンを準備する前に俺が逝く準備をしなくてはいけないよ
うだ。

これは本当にダメかもしれない、俺はそう思って振り上げられる
チェーンソーを眺めていた。唸りをあげ、俺に振り落とされるチェ
ーンソー。

でも、そのチェーンソーは俺を貫くことなく、粉微塵になって雨
と共に大地に降り注いだ。

「黒金さん……っ、あれ、いねえ」

てつきり、黒金さんが俺のことを助けてくれたのかと思ったのだ
が、そうではないようだ。周りには日和を除いて誰もいない。

「くっ、さすが魔王だ……」

「誰が魔王だよ」

魔王はあなたの母親だろうと突っ込もうと思ったのだが、日和は
俺を睨みつけるだけだった。

「魔王、ペレッツペ星人やファイー星人はあたしの味方だから時間はか
かるかもしれないけど討伐してやるわ」

そういつて雨の中走って消えてしまった。一体、あいつは何を言
っているのだろうか。そして、電波内容もなんだか人を殺めそうな
雰囲気になってきている。

「と、ともかく屋内に入って黒金さん達が帰ってくるのを待つしか
ないな」

ずぶ濡れの体は雨に冷やされてしまい、くしゃみが出てしまう。

俺は家の中へと入ろうとして家の裏にある林にふと、目がいつてし
まった。

「ん」

それは、やけに色白の、いや、青白い肌をしていて黒いローブをまとった女性だった。女性の手には黒い煙を吹きだしている大鎌が握られている。

絶望を感じさせる表情は歓喜へと変わり、唇が歪な形を作りだす。

悦んでいるのだ、獲物を見つけたから。

死神が俺のもとへと地面を滑ってやってくる。俺は、それをただ呆然と見つめるしかできなかった。

第十六話：強襲、チエーンソー日和（後書き）

日和はたぶん、ヒロインじゃありません。まだ、結構話せるということはまだましましなほうじゃないかな、そう思えてきます。ま、ともかく今後も更新を進めていきますので読んでいただけて評価していただければ幸いです。

第十七話：強襲、黒下着の死神

第十七話

一難去つてまた一難。いや、ねえ、まさか成人する前に子の言葉を聞く羽目になるとは思わなかったなあ。

のんきに構えている場合でもないので俺はさつさと家を盾にして反対側に逃げる………が、いきなり家の壁から死神が現れた。

「う、嘘だろ………」

「死神だから壁も通り抜けることが出来るのよ」

にやつと笑うその表情は獲物がおびえる姿を楽しむものだった。

さつさと切り刻めば終わるものを、何を思ったのか死神は鎌を自分の首にかけて笑っている。

「まさかねえ、最初に出会ったときはそんなもの微塵も感じられなかった………いやあ、あれはもしかしたらたかだか人間だと思っただけなのかもしれない。決めつけは目を狂わせてしまうからねえ」

雨だけだったのに風まで吹いてきて、横殴りの雨へと変わる。死神の黒のローブは風を受けてはだける。青白い肌、黒い上下の下着、そしていつものように干切れたローブがあらわになったが、彼女がそんなことを気にする様子もない。

「従うに値するかどうか、いちいち試験つてするの面倒なんだけどね。私つてまだこれで二回目なのよ」

「な、何言ってるんですか」

「うふふ、あなたはまだ知らなくていいことよ」

そして、再び鎌を握りしめた。ただ、鎌は先ほどまでの無機質なものは打って変わって鼓動をし始めたのだ。金属片だったと思っていた刃の部分には何やら血管のようなものが現れて脈打っている。「知らないまま死ぬのならそうしたほうがいいかもしれないもの。私はね、死神の中じゃ結構やさしいほうなのよ」

そういつて宙を滑ってやってくる。俺は急いで後ろ向きに逃げ出した。

「うっわあああああ」

叫んでみたが誰も助けに来てはくれない。しかも、先ほどの結界は壊れたわけではないために俺が外に出ることは当然、出来ない。

狭くはない家と庭なのだが、あっさり俺は追い詰められてしまった。追い詰められた一番の原因は壁に何度もぶつかったことだろうか。

「さあ、ここまでね」

本当にうれしそうに俺のことを見下していた。

「じゃ、ばいばい」

振り落とされた鎌は俺の首ではなく、盾に真っ二つに切るうとしている、そうすぐにわかった。

だが、今回もまた俺が怪我することはなかった。

「……………」

「……………」

目をつぶることなく見ていると、鎌は根元から折れて、砕けた。一体、何が起こっているのだろうかと考えるもさっぱりわからない。何か俺自身が特別な力に目覚めたというのなら何か能力を使ったような感じがあるはずなのだが、あいにく、尻もちについて手は地面にふれているままだ。冷たくて、寒いという感覚しか身体には残っていない。

「……………ふう、やっぱり私は死神か」

黒のローブは煙のように消え、死神はそのまま地面にひざを屈するように堕ちた。ちょうど俺の視界には彼女の豊かな胸が谷間を作っているところが確認できたが、そんなことよりも俺は聞きたいこ

とがあった。

「あ、あの、なんで俺を襲ったんですか」

「あゝ、強襲失敗しちゃったわ………死にたい」

汚れることも彼女にとってはどうでもいいことなのだろうか。土砂降りの中、膝をつくような状態からそのままうつぶせの状態へと変わった。

「よ、汚れますよ」

「どうでもいいわ」

そういつて寝転がっているのを放置できるわけもなく、俺は死神を抱えて一旦、家に入ることにした。これ以上誰かが襲ってくることはないだろう、だってこれ以上おかしな知り合いはいないはずだし。

雨は休まず、いまだに元気だった。

湯船につける前にシャワーを浴びてくださいと言ったのだが、素直に聞いてくれなかった。

「あなたが私を拾ってきたんだからシャワーであなたが洗えばいいでしょ」

にこつと笑ってそう言われるが、先ほどみたいに命の危険にさらされている状態ではない。死神とは言え、女性なのだ。青白い肌は冷たい、だが、何故だかドキドキしてしまう。

仕方がないので言うことを聞くことにした。シャワーを出して、頭から流してやる。

「さ、洗って」

「え」

泡のついたタオルを差し出される。死神はあろうことか、下着を

脱ぎ始めていた……。

「死神よ、わたしたちはそこまで頼んだ覚えはないぞ」

「く、黒金さんっ」

「あら、やっぱり見てたのね」

そして、黒金さんの向こうには白銀がラヴ・アーチャーを握りしめている。狙っている先には俺がいた。

「すみませんっ、蒼疾さんっ」

矢は放たれ、俺の胸へと突き刺さる。

くっ、まさか一発ネタだと思っていたラヴ・アーチャーを持ってくるとは……

「あれ、別にドキドキもしないぞ」

「やはりか……これで確定だな」

かなりがっかりしたような表情で黒金さんは俺に背を向ける。

「え、どういうことですか」

「安心しろ、蒼疾」

それだけ残して黒金さんは思い出したかのように濡れた半裸の死神を（いつの間にかブラジャーを脱いでいた、くそ、気づいてなかったぜ）連れて行く。白銀も、俺のことをじっと眺めて出て行ってしまった。

俺に残されたのは黒いブラジャー一つだけだった。

第十七話：強襲、黒下着の死神（後書き）

さて、新章続き、どうなる事か…

第十八話：蔵の中の忘れ”者”

第十八話

あれから急いで黒金さんたちを追ったのだが、古びてきしむ廊下に姿はなかった。外は土砂降り、外に出たはずなんてないと思いつつも、主だった部屋は探した。どこに行ったのだろうかと考えていると蔵のほうから音が聞こえてきたのでそこにいるのだろうか、そう思っただけで蔵の前までやってきた。

雨は躊躇なく俺を濡らし、汚す。暗くなると近寄りたたい雰囲気を出すために近所の子どもは夜、絶対にこの家に近寄ることはない。最近、よく小学生をこころで見ることが彼らの目的は白銀と遊ぶことであって、この蔵ではない。

「……………」
昔はお化け屋敷、今では黒金さん、白銀を召喚するきっかけとなつた古い蔵。音などしないし、開けられた形跡もない。しかし、一応確認はしておいたほうがいだろう。

鉄製の重い引き戸を引いて、中に入って電気をつける。当然、この蔵の中にも外世界の雨音は聞こえてくるが、どこかとおい事のようにしか聞こえない。

いつもと違って薄暗く、じめじめと息を吐いて夜の森を一人で歩くそれと同じ感覚を俺に味あわせる。唇をなめ、喉の調子を確認して俺は息を吸った。

「く、黒金さん、白銀 っ」

叫んでみたが、反応はない。やはりここじゃなかったと思いつながら出ようとする隅のほうから何か音が聞こえてきた。

「ん」

音のしてきたほう、最初はどこからはっきりとはわからない。だが、時間をたつごとに正確な位置がわかって行き、それに伴って近づいていくと、棺桶の上に本棚が倒れているという奇怪な光景だっ

た。

これまでこんなところに棺桶があったらどうかと誰かに問われるならば俺は答えを濁す。なぜなら、この蔵に入ったのはこれで確か四回目。一回目は二階のほうへとすぐに行っただし、二回目は白銀と話しながら入った。三回目は黒金さんが入っただけで俺は入り口付近にいたから音には気が付けなかったはずだ。

棺桶のほうをもう一度しっかり確認する。それはとても高価そうとは言えない代物で、まるで子供が作ったかのような不細工なものだった。安い黒の絵の具で色をつけたような染料のためなのかかわからないが、色ムラが激しい。不細工な造形品はガタガタと震えているのだ。一生懸命出ようとしているようだが、倒れている本棚はびくともしない。

「……………」

黒金さんたちのお友達だろうかと思いつつも、一応、本棚をどけることにした。あの二人がいてくれれば簡単にどかすことができ、さらには万全を期して子のパンドラの箱の中身とご対面することが出来るだろうが今は二人ともその姿をくらましている。人間って非力なんだなと改めて思わされたのだが、なんとかどかすことには成功した。

しかし、今度は棺桶のほうが動かなくなった。どうしたものだろうかと思つて棺桶に近づくと声がしてくる。

『あの、もしかして若様ですか』

「は」

若様……………それが形になって入ってくる前、俺の脳みそは誤変換を起こして『若奥様ですか』と捉えていた。

『おお、やはりわたくしを助けてくださったのは若様なのですね』

棺桶のふたが徐々にスライドされていく。そして、俺より身長の高い女性が俺の前へと執事服姿で現れた。

「正確に言うとはじめましてではありませんが、改めて自己紹介をさせていただきます。わたくしの名前は近藤睦月、魔王の素質を持

った神埼蒼疾様の執事でございます」

慇懃に礼をした近藤睦月という女性を俺は凝視して首をかしげた。

「へ、魔王………」

「ええ、そうですよ」

にこりとほほ笑む近藤と名乗った執事服の女性。静かに棺桶の外に出てもう一度俺のほうへ頭を下げた。

「これから一生、お供させていただきますのでどうぞ、わたくしの名前を心にとどめておいてください」

「おかしいとは前々から思っていたんだ」

黒金はため息をつきながら白銀のほうを見る。場所は屋根裏部屋、黒金が発見して自分の部屋として使っていた場所だった。きつと、この家の以前の持ち主である蒼疾の祖母が作ったのだろう。

「お前は確かに低級天使だが、今の実力は上級天使並み。召喚した蒼疾の魔力を吸ってそこまで強くなれた。だから、死神を倒すことが出来たと言っている」

基本的に死神は天使を狩ることはできず、その逆も同じことだ。

しかし、死神の暴挙を抑えるの天使の仕事のため、天使の魔力が死神のそれより高ければ必然的に従わせることが可能になる。

「そ、そうですよねえ。よくよく考えてみればこんな可愛い私が死神を抑えることなんてできませんよねえ」

可愛いという言葉が無視して黒金は話を続ける。

「蔵の中の本はすべてではないが魔界や天界に關係する本、そして蒼疾の祖母とやらが書き記した鍵付きの書物……あれは蒼疾しか読めないやつだな。たぶん、天使を役する本、悪魔を役する本などは蒼疾を守るためにあつたんだろう」

何の変哲もない鍵付きのガラス戸。黒金は壊そうとしたのだがそれらは壊れるどころか震えることさえなかった。ガラスに付着した埃も一切落ちていないところをみるとかなり堅固な壁だった。

「じゃあ、やっぱり私たちは蒼疾さんを守らないといけないんですか」

「そうだろうなあ。しかしまあ、変な話だが……この私にラヴ・アーチャーを効かせるのだから素晴らしい魔力だな。大体、相手より魔力が強くないとラヴ・アーチャーは効かないからな」

「わ、私って魔王のお嫁さんになれるんでしょうか……」

白銀がそういうと黒金が不機嫌そうに睨みつける。

「ふん、お前みたいな天使が魔王の嫁なんかになれるわけがないだろう。白銀、大体蒼疾が魔王になるとは限らない」

「そ、そうですよね」

そんな話をしていて二人だったが、何かを感じ取ったのか家の蔵のほうへと視線を向ける。

「……まさか、まだあの蔵の中には厄介な奴がいたのか」

蔵に入ったときに一切の気配感じられなかった……いや、他の存在と干渉することなくもしかしたら異世界に隔離されていたのかもしれない。そう考えながら黒金はため息をつくのだった。

「吸血……鬼か」

「あ、あの、私……吸血鬼って初めて見ます」

白銀、黒金は急いで蔵のほうへと走って向かうのだった。

第十八話：蔵の中の忘れ”者”（後書き）

さてさて、これから一体どうなるものか。漠然と頭の中では考えていますが実際にそれを他人と共用するために文字にするものなのですがこれまた難しい行為です。言い換えれば自分の妄想を現実にするって感じですから。自分の思いを他人に伝える、それも似たようなものです。後はどうやってうまく表現するか………自分の力を試してみたいのなら漫画を小説にして読み直してみることで………とは誰かが言っていたこと、誰が言ってくれたのかは今では思い出すことすらできませんね。

第十九話：横流し可能な吸血鬼

第十九話

「魔王とは、その空間を支配することを認められたものと言って構いません。自ら世界を構築できず、他者の空間を占拠して国を作り上げるものなど魔王ではなく、単なる支配者です。いずれは座を追われ、語り継がれることのない単なる小物として命を散らしますが、魔王はほぼ絶対的な存在です。魔王を倒せばその空間はすべてを失い、無に帰します。まあ、これには……」

続けようとしたところで蔵の扉があげ放たれた。

「あ、白銀と黒金さん」

「新入りがわたしたちに挨拶もなしとは大きく出たな」

「そうですそうです」

小さな黒金さんに隠れるように白銀がそういう。うわあ、こいつも大きく出たな。

「なるほど、あなた方が守護者、ええと、がーでいあんに選ばれた天使と悪魔ですね」

俺に対してのやさしい対応ではなく、事務的な口調。

「ふん、お前が蒼疾の教育係か」

「ええ、そうですよ。わたくしは若様のおばあさまである神埼シンシア様より命を受けて教育係となった俗に言う吸血鬼の近藤睦月と申します。以後、お見知り置きを」

これまた事務的でまるで二人のことを見下すようであった。

「本来ならば若様がここを継承された日に姿を現す予定でしたが……事故がございまして出ることが出来なかったのです」

「事故ですか」

「ええ、そうです。この話はまた今度にさせていただきますが、ひとつ先に言わせてもらいたいことがあります」

白銀、黒金さんを見た後にこういうのだった。

「残念ながら、お二人ともがーでいあんになるには実力不足のようですね」

「な」

「ええっ」

驚いたのは俺と白銀。白銀だけならばこの場の誰もが納得して『なあんだ、やつぱりか』と言っていたことに違いない。しかし、黒金さんが入っていたことを考えるとそう和やかなムードで終わるものでもなかった。

「ほう、女よ……わたしの実力すら卑下するか。ならば貴様の身体で試してみるか」

目は爛々と輝いており、それらの視線はすべて近藤のほうへと向けられている。殺気、とでもいうのか知らないが黒金さんからあふれ出ている見えない何かも怖くて近寄りがたく、白銀は気がつけば蔵の外に出て震えていた。

「わたくしのこの身体を傷めつけない、滅茶苦茶にしていいたいという権利は残念ながら若様であられます蒼疾様だけです」

「そうか、それならその権利、わたしにも使わせてもらおうっ」

やれやれ、困ったものですねとつぶやくだけで近藤は何もせず、黒金さんのほうを見ていた。俺は止めようとしたのだが近藤がそれを許さない。

「若様にもしものことがあっては大変です。座っていてください…」

……当然、わたくしもあの方もどちらも怪我などしませんからね」

ほほ笑むその表情はとても優しく、不安を打ち消す効果があった。だから俺は信じたのだらう、彼女を。

そして、黒金さんは躊躇なく剣を宙に浮かせ、近藤へと飛ばす。

「無駄ですよ」

言葉通り、剣は霧散し、当然ながら近藤には何一つとあたることはなかった。

「なっ」

「嘘……………」

「……………」

黒金さんは言葉をなくし、白銀はただただ目を見開いて近藤という女性を見つめていた。

「近藤睦月、神埼蒼疾様のすべてを世話する吸血鬼でございます。今後ともお見知り置きを……………」

ただただ、慇懃に礼をする近藤睦月という女性は格好よかった、それだけだ。

あれだけ降っていた雨がやむことはなく、暗くなった今も変わらなかつた。

事務的な時計の音、そして雨音以外は聞こえることのない空間。

「……………」

ただひたすらに居心地が悪かつた。

黒金さん、そして白銀は先ほどからずっと近藤のことを凝視しており、近藤は静かに俺の後ろに立っているだけ。きつと、彼女の馬の尻尾も風がないので揺れることはないだろう。

「な、なあ、近藤って呼べばいいんだっけ」

「いえ、若様はどうぞ睦月とおよびください」

「睦月さんっ」

そういったのは俺ではなく、白銀だった。

「白銀さまと言いましたか。馴れ馴れしいので近藤さんとお呼びください」

「これまた事務的で冷たい。」

「どつちでもいいですけど、黒金さんのあれをどうやってはじいたんですかっ。感じる魔力なんて人間に毛が生えた程度にしか感じられないんですけど」

失礼とも思っただのだろうかとても申し訳なさそうところが天使のようであった。

「ええ、わたくしの魔力は白銀様、黒金様に匹敵することはまずあり得ません。それこそ、そこらにうじゃうじゃという人間が束になつて襲ってきたならば負けてしまうと断言できます」

「ふん、ならばさっきのあれはなんだ、悪い冗談か、手品の一種か」
不貞腐れたように黒金さんは頬杖をつきながら睨みつける。その視線を受けてもなお、近藤の、彼女の堂々とした態度は変わりようがなかった。

「まあ、そういった類のものです。わたくしは以前、若様の血を飲んだことがありますからね」

「ああ、なるほどな」

合点が言っただため息をついて黒金さんはそっぽを向いた。白銀は首をかしげながら俺のほうを見るが、あいにく、そういった知識を持ち合わせていないために答えようがない。他の知識なら結構持っているんだけどな。

「若様と一定距離を保っていればわたくしは若様の力を自由に使えることが出来るのです」

「え、ええっ。それって……」

「ですから、魔力は微々たるものだとしても若様の力を、言い方が悪いかもしれませんが横流しすることが可能なのです」

誇らしげにそう言っただけで彼女は続ける。

「だから、わたくしのこの身体を傷つけることが出来るのは若様ただお一人なのですよ」

「悪い、さっぱりわからなかった」

「いえ、若様はただ座って好きなことをわたくしに言ってくれれば構いません。おはようからお休みまで、肩もみから下の世話までわたくしはなんでもいたしますから」

目の中には炎が燃えていた。

「あ、ああ、そうなんだ………って、ところでなんでそんなに俺につくそうしてるのさ」

「そうですね、蒼疾様はぱしってなんぼの存在です」

ぱしりは時として自分より下の存在を使いつぱしりにするのである。そういえば最近、よく白銀に使われていた気がしないでもないな。代わりに、私の体を好きにしてくれて構いませんよと言われたが足で蹴っておいた。

「白銀様、後で血を抜きますから覚悟しておいてくださいね」

「へ」

「こほん、若様に絶対忠誠を誓うのにはちゃんとした理由があるんですよ」

近藤、いや、睦月はどこか遠くを見るような眼をした。白銀、そして黒金さんはそんな彼女をしっかりと見ている。

そして彼女は話し始めるのだった。

第十九話：横流し可能な吸血鬼（後書き）

次はどうしよう、こうしようなんて考えずに前を向いて進むことができる人がどれほど羨ましいものか。雨月を構成しているものは妬み、嫉み、嫉妬、羨ましい、羨望、やさしさ、偽善、邪、他人のボケをスルーするやさしさなどです。

第二十話：魔王の世話役

第二十話

「人間の中にまれに、周りの人間と比べて非常に能力の高いものが生まれるように、吸血鬼の中にもたまにそういったものが生まれることがあります」

そんな感じで睦月は話を始めるのだった。

「ま、わたくしの場合それは逆でして本当に残念なことに人よりちよつと身体能力の高い吸血鬼という最悪な形です。その気になれば人間など人差し指で好きなように出来るのが吸血鬼なんですけどね、いわば落ちこぼれです」

「落ちこぼれ……………」

なんだか、白銀が嬉しそうに睦月のことを見ていた。何故だろう、こいつはもしかして自分と同じでも思っていたのだろうか。

「努力で超えられる壁ではありませんでしたし、人の血を欲する吸血鬼としてはこれまた実に不便なもので一族はわたくしを捨てました」

「捨てた……………」

俺はつい、口に漏らしていた。結構きつい言葉だったのだが睦月自身は何とも思っていないのか冷めているわけでもなく、ただ淡々と言葉を口から吐き出す。

「ええ、そうです。あの時はごたごたがあっっていましたね。ま、捨てられたといっても捨て駒扱いです。一人がやられている間にその他は逃げ延びるといって一種の戦略です。結果から言うならばわたくしは世間を騒がしていた猟奇事件の犯人として吸血鬼を討伐しに来た輩にさしだされたようなものです……………たぶん、あのままだったら確実に血祭りにされていたでしょうね。実際、危ないところまでリンチを受けましたから」

恐怖がよみがえったのかぶるりと震えていた。外の雨はやんでい

るようで、音が聞こえない。黒金さんはどうでもよさそうな顔で、白銀は口を押さえながら彼女の話を聞いている。

「血も飲んでいない状態でしたから最悪でしたよ。動けず滅多打ち……… 生命力は結構ありましたから数十分はしのいでいました。それが以降は段々と目の前が暗くなつて行きましたよ。ああ、ここで死ぬんだなと実感、というよりもこの世の摂理として死を受けとろうとしていたのかもしれませんが」

懐かしげに、そしてどこか遠くを見る目をしていた。

「気が付いたらわたくしに対する暴行は止まっていました。不思議に思つて顔を上げますとそこには一人の老婆と一人の子供が………」
「ともかく、蒼疾がお前の命を救つた、そうなんだろう」

黒金さんはため息をついてそう言った。どうでもいい、お前の話は聞きたくもないというオーラが体からにじみ出していた。

「ええ、まあ、そんなところです」

そして、睦月のほうは話の腰を折られたというのに別段気にしている様子でもない。

「え、ええつ。今いい所なのにつ。黒金さん、あなたって人は………」

…たぶん、KYつてやつですよ」

しかし、これまた意外なことにその折れた話の腰を戻そうとしている奴が一人いて、黒金さんに対して意見をしている。まったく、恐れ多い奴だな、白銀よ。

「要点だけ話せ、無駄に長い話を聞いてやるほどわたしは暇じゃない」

ともすれば、意外と白銀のことを考えて譲歩してくれたようだった。この悪魔さんは本当に悪魔なのかと時たま考えさせられる。

「そうですね、若様はわたくしを見て泣かれたのです。それで周りから通報が入つて警察がやってきてわたくしは保護される身となりました。そして、若様のおばあさまに引き取られたのちに隙を盗んでつい、泊まっておられた若様を襲つてしまったのですよ」

「ふん、所詮はそんなものか。どうせ、お前のような女は蒼疾の寝

込みを襲ったのだろう」

「恥ずかしながら」

本当に恥ずかしがって俺のほうを見ては何度も頭を下げていた。

「あ、あの、血なんておいしいんですか」

「ええ、それはもうっ、最高でしたよ」

すごくいい笑みで恐ろしい事を口に出している。おい、白銀……

俺のことをじっと見ていても絶対に血を飲ませたりはしないぞっ。

「こんなにうまい血があるのかっ………わたくしは感動で胸がいっぱいでした。しかし、若様の魔力がわたくしの身体に流れ込んだことに気がついたとき、急に体が苦しみ始めたのです」

「え、どんなふうにですかっ」

テーブルの真ん中にまで身体を乗り出して話を聞いている。そんなに食いつくところなのだろうかと思いつつ、俺はちゃんと席に座るよう白銀に注意するのだった。

「内臓が自分のものではないように感じるのですよ。暴れ、身体が段々と苦しくなっていき血が体中から噴き出したのです」

「蒼疾自身にかけられた誰かの呪いか」

「ええ、シンシア様がその呪いをかけていたんですよ。蒼疾様の布団を血で汚しながらのたうちまわっていたわたくしですが、気がつけば近くにシンシア様がいたので。てっきり、馬鹿な吸血鬼の末路を見にただだけかと思っただのですが違いました。わたくしにシンシア様が契約を持ちかけてきたのです」

びくりと黒金さんの眉が動いた。何か思い当たる節でもあるのだろうか。

「すべてを若様に捧げるのならば命は助かる、シンシア様はそう言ったのです。ですからわたくしは………」

「白銀、もういいだろう」

どうでもよさげに黒金さんはそういうのだった。

「睦月といったな、これからよろしく頼む」

「ええ、よろしくお願ひします」

珍しい事に黒金さんはそうだったのだ。俺と黒金は理解が出来ないため、二人して見合ったがやはりわからないものはわからなかった。

「皆様に言っておきますが若様の魔力はいったん、消滅していたはずなのです。それがまた、天使や悪魔を召喚したことによってなのかはわかりませんが徐々に力を取り戻してきています。絶対に人外の者たちに知られないように気を付けてください」

睦月はそういったのだが、黒金さんと白銀は黙りこんでお互いの顔を見ていた。

「あれ、二人ともどうかしたのか」

「まあ、なんだ。誰しも失敗というやつはあるからな」

「そ、そうですよね。今後は気をつけますのでよろしくお願いします、近藤さん」

「なあ、そんなことより俺の魔力がどうのこうのってどういう意味だよ」

「ですから、若様は魔王になる権利が、いや、魔王になる義務があるお方だということですよ」

「はあ、魔王ねえ」

魔王といえば俺の頭に入ってくるのは小太りのおばさんである。

見た目がああいった一般人のために魔王よりもチェンソーを振り回す狂人のほうが怖いのだが。

「人外の者に知られてしまった場合、若様は幾度となく面倒事に巻き込まれてしまうでしょう」

「襲撃されたりするのか」

「それも面倒事の一つですね」

まあ、それならいつもされているし。なれてはないが、覚悟はできるかもしれない。

「他に面倒事ってどういったことなんですか」

手を挙げて白銀が質問する。

「他の面倒事は蒼疾の魔力管理。つまるところは世界を構築して魔

力のある程度消費しなくてはいけない」

答えたのは黒金さんで白銀はうんうんとうなずいていた。

「もし、世界を構築しなかったらどうなるんですか。もしかして、蒼疾さんは風船のように膨れて破裂するとかですかね」

何さらりと怖いことを答えてくれてるんだよっ。そう思ったがもしかして本当かもしれないと思って黒金さんのほうを見る。

「蒼疾から放たれた魔力は世界を良くない方向へと誘導するからな神に目をつけられてひとさしで、そこまでだ」

ただただ、端的にそう語る黒金さんの表情はどこか冷たいものがあつた。

第二十話：魔王の世話役（後書き）

気が付いてみれば二十話目。ああ、続けようと思えば続くんだな、
そう考える今日この頃です。

第二十一話：“城”の掃除

第二十一話

「さあ、ではこの屋敷をしつかりと掃除しましょう」

近藤はエプロンをつけてそう言った。そして、白銀、黒金さん、そして俺は返事をしなかった。

「あの、この家ってかなり広いですよ。なんだか外から見たら一階だけの様な気がしますけど二階もありますし、屋根裏まで完備、部屋数だつて一階だけで二ケタに上りますし、おまけに地下室までありますから」

「わたしの様なものが掃除をするわけないだろう」

「一日目で掃除は体験したからもうおなかいっぱいだ。業者呼んだほうが早いだろ。それに俺はこれから学校があるし」

月曜日、学校は休みではない。日曜日という休日の次に来るためにいつもよりも厳しい学園生活を送る可能性が高いのだ。

そういった文句を垂れていたのだが徐々に近藤の笑顔が危うい顔へと変貌していった。

「若様はどうぞ登校時間まで座っていてください。世話役のわたくしや、がーでいあんの白銀さんと黒金さんが掃除をいたしますから」

「よっしゃ」

「ああっ、汚いですよっ」

「汚いのはこの家ですから、白銀さん、掃除をしましょうね」

にこりとほほ笑むのだが、彼女の瞳は笑っていないかった。そして、気がつけば黒金さんの姿がない。

「まったく、あのごきぶりはしかたがありませんね」

俺の頭の中にごきぶりのコスプレをしている黒金さんの姿が浮かび上がった。あ、かわいいな、いや、そうじゃなくて。

「ご、ごきぶりってそれはさすがに言いすぎじゃないか」

「いえ、ごきぶりは悪魔ですよ。あれっっていきなり飛ぶんですよ、

飛んで、顔に張り付いたらもうそれこそ、軽い地獄です。ですから、ごきぶりは悪魔の一種で、悪魔はごきぶりです」

「誰がゴキブリだ、誰が」

黒金さんが現れる。

「ほら、それにいつも黒い召し物をまとっていますし、このサイズですからもしかしたら黒金さんは突然変異したごきぶりかもしれませんよ」

じつと黒金さんを見ると彼女はぶんぶんと首を振っていた。

「わ、わたしはごきぶりの変異種じゃないぞ」

「わかつてますよ、そんなこと」

「ま、ともかくごきぶりの巣窟となっているだろうこの家から追います。下手に残していたりしたらそれこそ、若様の魔力が何らかの影響でごきぶりを巨大化、または変貌させてしまつかもしれませんからね」

まるで、予期するかのようにそう言つと黒金さんとともに部屋を出て行ったのだった。

俺が学校に行くときは大体黒金さんが付いてくるのだが今日は掃除をしているためについてきてくれはしなかった。

「はあ、襲われたらどうしよう」

先日、俺を襲ってきた日和と死神のことを考える。睦月の話によればけがをすることはないとのことだったが、正直言つて狂喜乱舞で襲ってくるのだから恐ろしいことこの上ない。

ヴーン

不吉な音色が俺の耳へと届いてきた。あたりを見渡してすぐさま隠れることのできるごみ箱の中へと逃げ込んだ。

「ちえっちえっちえっちえ、チーンソ〜。ぶんぶん唸ってきりきりきりきり切りっざむ〜。気になるあの子が唸って困る〜」

なんとこの歌をうたっているのだろうか、あんな歌を歌っていたら確実に痛い人を見る目で見られるぞ。

「あ、あんなところにあたしを見守ってくれている電柱の陰の人がっ。まっつ〜電柱の陰のあしながおじさんっ」

そういいながらどこかに去っていった。ああ、本当、心臓に悪い奴だな、あいつは。

はるか彼方のほうから『電柱地底湖建設募集中』というまったく意味不明な言葉聞こえてきたのでそちらのほうにはいかないようにしたのであった。

しかしまあ、俺を襲ってきたのは危ない日とだけではない。学校にいる間は集団の中にいるので安心だったが帰路について俺はいやなものを見つけてしまった。

段ボールの中に入っている死神。

「あら、こんにちは」

「こ、こんにちは」

首にはいつものロープ、そしてぼろ布をまとった死神が裏路地に捨てられていたのである。

「あの、魔王に捨てられたんですか」

「いや、あなたのお所の悪魔にあれから捨てられたのよ」

にこつとほほ笑んでそう言われるが、遠回しにお前が捨てたといわんばかりだな。

「えっと、家に帰ったらどうですか」

「それがねえ、結界張られてこの段ボールの中から出ることもすままならないのよ。困った困った」

困ってなさそうにそういうため、俺は助けたほうがいいのか、このまま走って逃げたほうがいいのか決めかねていた。

「もし、私を助けてくれたらお礼をしてあげるわよ」

「お礼ですか」

「ええ、そう、お礼」

おいて逃げるのも十分怖かったのだが、そのお礼とやらもかなり怖かったりする。

「えっと、先に聞いておきますけどお礼ってどんなことをするんですか」

「そうねえ、夜な夜な夢枕にたつて縄で縛ったり、鞭で叩いたりしてあげるわ」

「いや、そんなお礼はいらないうす」

「じゃあ、私の黒いローブの予備をあげるわ。夏は涼しいし、冬は暖かいのよ」

なるほど、死神のローブなら珍しいかな、そう思って俺は助けることにしたのだがそこで問題がひとつ出てきた。

「あの、どうすれば助けることができるんですか」

「私に手を差し伸べて助けたいと思えばいいわよ」

言われた通り、行動を起こす。彼女の言った通り、段ボールから死神が出てきた。

「じゃあ、出てきてさっそくだけど魂刈ってあげるわね」

「ひいつ」

「うそうそ、冗談よ。これ、約束の品ね」

どこから取り出したのかはわからなかったが俺に闇を手渡した。

いや、本当闇というしかない代物で重さなんて感じないのだがただそこに何かがあるというのだけは理解できた。

「困った時は両手をあげて『助けて〜、死神おね〜さ〜んっ』と無様に叫べば片道一分で助けに来てあげるわ」

「はあ、それはどうも」

じゃあ、死霊が私を呼んでいるからもう行くわといって彼女は去って行った。絶対にそんな言葉を叫ぶかよと思ったのだが、後日、呼ばなくてはいけない日がやってくるとは思いもしなかった。

第二十一話：“城”の掃除（後書き）

アットホームな空気を一発でコキユートスへと陥れるおやじギャグ。
スキー、スノーボード、スケート、スケボー……………苦手なのに滑るのは
うまい、城のことを知るうっ……………どうも、雨月でした。

第二十二話・魔王式

第二十二話

「おい、近藤」

「なんでしよう、出来れば近藤さんと呼んでいただけると嬉しいのですが」

執事服は掃除のために汚れており、掃除に適さない黒のドレスをまとった小さな女性、黒金も汚れていた。場所は地下室、一階と二階の掃除は終わり、残るはここだけとなった。ハイペースで掃除を続けていたのだが一切の疲れを感じないのはやはり人間ではないからか。

「お前、魔王になるための条件は魔力だけじゃないだろう」

「ええ、当然そうですよ」

「え、そうなんですか」

真つ白だった服はすでに埃やこれまで溜まっていた汚れで黄色と茶色を混ぜたような汚い色へと変貌していた。だが、そんなこと関係ないとばかりに天使、白銀は一生懸命掃除をしている。

「魔力は当然ながら、一個の命を大切にし、すべての命を時として裁かなければいけません。大小、さまざまな魔界があります。魔王ならばどのような相手も裁かなくてはなりませんからね。少々、若様にはそこが欠けているところかなとは思っています」

困ったものだと言わんばかりにはたきを置いて雑巾でこすり始める。

「無理に魔王にする必要なんてないだろう。完全に覚醒なんてしてないのだから魔力を消滅させて人として生活させたほうがいいのではないのか」

魔王にさせるのが仕事だと言わんばかりの女性が近藤睦月、その人なのだが周りを見渡してため息をついた。

「それがなかなかどうして、うまくはいかないのですよ。わたくし

もいろいろと探していたものです」

ため息一つ、窓ガラスについたのちに今度は肩を落とした。白銀は首をかしげ、黒金も首をかしげるのだった。

「何故だ。魔力の放出を人外のものにし続ければいいのだろう。それならば魔界へと旅立って魔界の住人すべてに……」

「そんなことしたら世界が一つ、消滅してしまいますよ」

重い言葉を口に行っている割にはどうでも好さそうに雑巾を汚れたバケツの中へと静かにつける。

「残念ながら、シンシア様、若様のおばあさまの呪いによって若様の魔力を受けたものは破裂してしまいます」

「え、なんですか。そんなにいっぱいもらわなくて調節してもらえれば私もすつごく強い天使になれるんじゃないんですかねえ」

ぼーっとした調子で答えているのだが、しつかりと掃除をしている。ごきぶり退治の罫も設置完了したところだった。

「これがまた、普通の呪いならよかったのですがシンシア様の呪いは面倒なのです。そうですね、白銀様を例にあげてみましょう」

「おお、嬉しいですね」

これから仮想の中とはいえ、破裂させられることも知らずに汚れた天使は嬉しそうにはしゃぐのだった。

「放棄するため、魔力を他人に譲渡しようとする発動するのです。そして、魔力を注いだ瞬間に白銀様は破裂します」

パンと口にすると言銀は詰め寄るのだった。

「な、なんですかっ」

「つまり、『白銀の限界量』白銀の限界量+1』といった計算式だとわかりやすいですかね」

「なんだかおかしくないですか。その式が正しいのなら私の限界量に+1されて魔力をたくさん保有するってことになるんじゃないですかね」

小首をかしげる白銀に黒金はうなずく。

「一応はな。だけど、わたしたちの身体は数値じゃない。魔力をも

らうということは一瞬限界を超えることじゃなくてずっと続くことだ。ごまかす瞬間が長ければ長いほど身体は耐えることなんて出来やしない。修行とは己の力を鍛えるためにあるが、それと同時にその力をためることが出来る器も作らなくてはいけない。無理に力をもらっても受け入れる器がないから器ごと壊れてしまうというわけさ」

「う、うーん、わかるようなわからないような……」

頭を抱える白銀に睦月はため息をついたのだった。

「わかる、わからないはともかく、呪いによって魔力を放棄するということが出来ないことに変わりません」

「その呪いを解けばいいんだろう」

「ええ、確かに呪いをどうにかすればいいのかもしれませんがこれがまたシンシア様が滅茶苦茶な解呪方法なのですよ」

「どんな方法なんですか」

「若様の命との引き換えです」

「堂々巡りだな」

お手あげだと黒金ははたきを放り出した。

「所詮この世は都合よく廻ってはくれないか」

「いえ、恐ろしいほど都合よく廻ってはいますよ……死んでしまったシンシア様の思惑通り」

「どうにかしないと蒼疾さんはいずれ魔王になってしまっんですねえ」

白銀はふんぞり返っている召喚主のことを考えたのだが、どうにも似合わなかった。

「他の方法を模索してはどうだ」

「下手に動くともそれこそ、シンシア様の意思に呪われますよ。『神』に直接魔力を消してもらうことにも呪いが掛かっています。まあ、しっかりとこれにも解く方法がありますが魔王になってのさばったほうがまだましですね」

「えっと、なんで魔王になるのがいけないんですかねえ」

白銀は気になってふと尋ねたのだった。

「別に魔王になれば好き勝手ふるまえると思うんですけど」

「まあ、確かにそうですね」

「そうだな、確かに好き勝手にふるまうことが出来るなあ」

ため息を二人ともついており、そんな二人を白銀は不思議そうに見つめるのだった。

「あの、それなら別にいいんじゃない……」

「確実にわたしらは捨てられるぞ、白銀」

「え」

驚愕したまま白銀は動かなくなった。そして、近くでは近藤がため息をつく。

「わたしは血を吸って消え去るまで一緒なのですがきつと冷めた生活が待っているんでしょうね。ぶっきらぼうな愛情なんて一切なく、事務的、何のいべんともない生活、ちょっとした冗談で確実に謀反と疑われて命を散らすでしょうね…… 白銀様、魔王になると変な話ではありますが人が変わってしまいます」

「で、でもっ、魔界を納めていた魔王様はしっかりしたいいい人だったじゃないですかっ」

「まあ、確かに魔王は素晴らしい魔王だった。それはわたしも認めるが魔王はあくまで前の魔王が逃げたから魔王になっただけにすぎない。新しく世界を創って魔王となるものはそうだな、絶対に以前の自分を知るものを近くに置いたりしないだろうな。せつかく自分の好き勝手にできるのに口出ししそうな相手は絶対に捨てるぞ」

さびしそうに黒金はそう言った。

「そ、蒼疾さんに限ってそんなことはありませんよっ」

「これだから天使は甘いんだ。蒼疾の意思を尊重する前に魔王にな

らせようとしているのはシンシアとかいう蒼疾の祖母だ。捨てなければ蒼疾の身に危険が及ぶか、わたしたちが消滅するか………たぶん、どちらかだ」

「そ、そんな………」

がつくりと膝をついた白銀、そして他の二人はため息をついた。

「ただいま」

そんな時、一階から声が聞こえてきたのだった。

「あ、蒼疾さんですっ」

ぱつと顔が明るくなって急いで階段を駆け上がる。当然、白銀の後ろに黒金、そして近藤が続く。

廊下を歩いてきた蒼疾に飛びつき、涙ながらに白銀は訴えるのだった。

「そ、蒼疾さん、捨てないで下さいっ」

「はっ、捨てるってなんだよ」

「蒼疾、お帰り」

どことなく白銀をうらやましそうに見た後に黒金はため息をつきながらそういう。

「ああ、ただ今帰りました。黒金さん、あんな危険物をそこらの道に捨てるのは危ないですよ」

「悪かった、次からは気をつけよう」

「お帰りなさいませ、若様」

「ただ今、で、三人とも汚れてるけど掃除は終わったのかよ」

「ええ、まあ。あの、ひとつお話があるのですが、よろしいでしょうか」

何かを決意したように、近藤は口を開く。

「ははあ、なるほどねえ」

一応、というか蒼疾に地下室で話したことを話すことにしたのだ。祖母のことを結果的に悪いように思わされるのでどうかと思っただが、あまり気にしていないようでもある。

「やっぱ、この家をもらうなんて権利放棄しちまえばよかったかなあ」

「そうすればきつと、夢枕に立ってますよ」

「そうだろうな」

一瞬だけなごんだがそれもほんの一瞬。再び暗い雰囲気は続く。

「まあ、魔王なんてなかなかつかない職業だとは思っぜ。ちようど高校卒業したら進路はどうしようかなって考えていたところだし」

「蒼疾さんっ、それってかなり適当に決めてますよねっ」

「あ、ああ、悪い悪い。お前らが俺を魔王にしたくないのならしなきゃいいだろ」

「蒼疾、それが出来ないから苦労しているんだ」

「そうですよ」

困ったものだと白銀、黒金、睦月は考えるが蒼疾はどうでもよさそうにいうのだった。

「睦月が横流し出来るんだったら俺の代わりにすればいいんじゃないのか」

「あ」

今更気がついたと言わんばかりに蒼疾のほうを見る。

「さすが若様。やはり、魔王になるための頭脳を持っていますね」

「ほめても何も出ないぞ」

「でも……蒼疾、お前は本当に魔王にならなくていいんだな」

「え、なんでですか」

蒼疾は首をかしげ、黒金のほうを見る。

「だって、好き勝手出来るんですよ。女性に囲まれてうはうは、お金に埋もれてにやはははは、とかハーレム築けるのに」

「おいおい、俺は今だってハーレムだろ。白銀に黒金さん、そして新たに睦月ときたもんだ。せいぜい、相手できるのは数人ぐらいだろ」

魔王の生活よりはちっぴけな幸せを彼は冗談をいうような感じで主張するのだった。

「家だってこんなに大きいのがあるし、金はまあ、その気になればなんとかなるだろ。こここそ俺の魔界だね」

「さすが若様」

ほめられて調子に乗っている蒼疾を見ながら白銀はため息をつく。

「井の中の蛙って言葉、黒金さんは知っていますか」

「ああ、知っている。けどな、身の丈に合った幸せって大切だろう。蒼疾にハーレムは必要ないな」

「そ、そうですねえ」

「わたし一人で十分だ」

それだけ言って黒金は蒼疾の頭の上へと乗るのだった。

「なななな、なんですかそれはっ」

「おい、白銀、お前のためにプリン買ってきてやったぞ」

「若様、白銀様に対してはかなり甘やかしていませんか」

「そっだぞ」

「いやあ、さすが蒼疾さんはわかっていますね。ありがたく頂戴いたしますよ」

梅雨時の晴れはなんでこんなに美しいのだろうか、白銀は蒼疾へとほほ笑みかけるのだった。

第二十二話・魔王式（後書き）

サブでこちらを書いていたつもりが気がつけば入れ代わっていますね。まさか、勝手に打ち切っていた小説が復活するとは思いませんでしたよ。ああ、以前から雨月の小説を読んでいたあの作品を続けてくれと言ってくださればもしかしたら復活するかもしれません。評価、感想、アドバイス、ダメ出しなどよろしくお願いします。

第二十三話：Suffer from a nightmare

第二十三話

午前中は雨、昼からは晴天だった。

いつもと同じようでもんだか夢見心地の気分。俺はとりあえず家へと帰ることにする。しかし、おかしなことは続いているようで俺が帰る途中、誰一人として人と会えなかった。

「魔王の力とやらはもう滅茶苦茶なのね」

そう、人とは会えなかった、でも、死神に会ったのだ。

彼女は背を他人の家の壁に押し当て、静かに壁に立てかけられていた鎌をその手に握る。俺は後ずさったが獲物を捕らえるような目で俺を見てはいなかった。

「安心していいわ。あいにく、私だってしっかりと考える力はあるから無駄に鎌を消費したりしないもの」

そういつてひとつため息をついてこちらのほうへとやってくる。黒のローブの下には真っ白なワンピースを着ているようだった。

「あなたの土壇場の力、相変わらずすごいとだけほめておくわ」

「あの、さつきから一体何の話をしているんですか」

「ふふ、何の話をしているのかはあなたが自分の家に行けばわかるわ。でもね、ひとつだけ覚えておいてほしい事があるの」

「なんですか」

そういつと俺の耳に触れるか、触れないかの近距離でこう言った。

「困ったことがあったら私を呼んでね、そうしないと死んじゃうか

もよ」

「え」

聞き返すも、姿はない。ただそこにはどろりと溶けた黒い液体が溜まっているだけだった。

「まさかこれが死神さんってことじゃないよな」

消えてしまったのか、どうなってしまったのかは分からなかったが先ほどのやり取りで心に不安が募っていく。

梅雨がそろそろ開けるといいうのに先ほどまでの晴天とは打って変わって今にも降り出しそうな曇り空だ。灰色の空はどこまでも続いていて、俺の家がある山のほうも当然、雲が覆っている。

胸がざわつき、俺はいてもたってもいられなくなって走り出す。

当然、目的地は俺の家だ。

不思議なことに疲れるなんてことはなく、後は丘を登ればゴールなのだが、ここで雨が降ってくる。しかし、鉄の匂いがした為にそれらを手で受けてみると何故だろう、無色透明のはずの雨は真っ赤に染まって降ってきていた。まるでそれは血の雨のようで不安になった俺は三人の顔が見たくて先ほどよりも足の動きを速くする。

「ただいまっ。みんないる……………」

「逃げてくださいつ、蒼疾さんっ」

俺の腹部に衝撃が走る。

「かはっ」

灰が無理やり空気を押し出し、胃の中のものも反転しそうになったのだがこちらはなんとか気力でカバー！。突撃してきたのが白銀だと知ったが、いつもと様子が違った。

「く、黒金さんが近藤さんに喰われました」

それだけ言っただけで俺の胸で震えている。呆然とする俺の耳に何かを引きずるような、いや、とがったものが床を貫きながら歩いてくる音が聞こえたのだ。

「ひっ、き、来ましたっ。逃げましょう」

俺の手を取って白銀は玄関を後にする。引きずられるようにして外に出たのだが、それはもう俺たちのすぐ近くまでやってきており、鋭い爪のようなものを俺たち二人が先ほどまでいたところに突き刺していた。

「あ、ありやなんだよ」

「近藤さんですっ。蒼疾さんの魔力を他に回そうとしたらやっぱり、おばあさんの呪いがあったそうなんですよっ」

泣き叫びながら俺の首にひつついてくる。血の雨をもともせず、それは玄関を窮屈そうに出てくると開放感に酔いしれたような面をした。

そうだな、自分の両手をパーにして手首あたりでくつつける。そして、爪をどこか床につけてその手首あたりから人の上半身が生えていると考えてくれればきちんと伝わるのだろうか。背中からは肉塊が生えており、ぱっくりと割れた背中からは触手が現れる。

あまりにグロテスクな物体だ。俺はそれをただ呆けたように見ていた。

「完全に蒼疾さんの魔力を吸いつくした化け物ですよっ」

「は、はははは……嘘だろ」

「残念ながら嘘じゃありませんっ。このままじゃ、このままじゃ私たちも食べられちゃいますっ」

どの道、黒金さんが喰われてしまったのが事実ならば白銀がこん

な化け物に勝てるはずもない。魔王だ、なんだと言われてきた俺でさえ、魔力を完全に吸い取られている今、確実に単なる『人間』へとなり下がったことだろう。

ふと、死神のことが頭をよぎった。しかし、こんな化け物相手に彼女が勝てるはずが……それに、もしも呼んで巻き込むようなことがあつたら……

動かない俺たちに白銀が近藤と呼んだその化け物はゆっくりと、確実に近づいてきている。あせってしとめるまでもない、そう思っているのだろう。何故だか言いきる自信があつた。

触手が伸び、先がとがつた。どこに刺さるのか知らないが、そのとげの先には黒いドレスが無様に破れて引っかかっていた。ああ、俺の衣服も引っかかるのかと考える。

しかし、その触手は途中から鋭利な何かに断ち切られたのだった。

「まったく、無様に私の名前を呼んでねってあれだけ誘っていたのに……いくら魔王になる素質があろうとお姉さんのお願い事はしつかりと聞かなきゃだめなのよ」

「死神さん……」

呆然としていた俺たちの前に現れたのは黒いローブをまとって首に縄をぶら下げている女性。その手には自分の身長よりも長い柄、そして同じ長さの湾曲した刃がついている。

「悪夢はしつかり見たかしら。ま、これを夢にしちゃうってことが考えられないことなのよ」

「あ、た、助けに来てくれてありがとうございます」

「うふふ、素直な男の子は大好きよ。魔王の素質は魔力だけじゃない、罰を与えるのも上に立つ者の条件よ。その目に焼き付けておくといいわ」

漆黒の翼もない、純白の翼もない。ただ、彼女は血の雨で真つ赤に染まった大地を蹴るとそのまま浮遊。糸や爪、さまざまなのが死神へと殺到するがそれらがかすることなど一度もなく、彼女はぼろぼろになった執事服を着ている睦月の首に大鎌を引っかけた。当然、俺は目をそむけようとして……目を覚ましたのだった。

第二十三話・Suffer from a nightmare(後書き)

感想、評価お待ちしております。今日はシンプルにまとめてみました。適当なあとがき、誰か読んでいるのだろうかと首をかしげつつも、この小説が終わるまで続けていこうと思います。

第二十四話：世界の創造主

第二十四話

「蒼疾さん、蒼疾さん、起きてください。学校に遅刻しちゃいますよ」

「う……………ん」

目を覚ます。目の前には白銀のあどけない顔があった。身体を起こし、あたりを確認するとそこは俺の部屋だ。

そして、なぜか白銀は俺が通っている高校の制服を着ている。

「おい、白銀……………なんでお前制服なんて着ているんだよ」

「蒼疾さん、何度言ったらわかるんですか。私の名前は『しろがね』じゃなくて、『しろがね』ですよ。それに、幼馴染なんですから『ミカ』って呼んでくださいよ」

頬をぷくつと膨らませて上目遣いに俺を睨む。

「は、あ……………なんだそれ」

「なんだそれじゃありません、とりあえず学校に行きましょうよ。」

家の前でミシエ姉さんも待っています」

「誰だそれ」

「誰だそれって……………もう、そんなことを言っていると怒られちゃいますよ。また寝ぼけてるんですね」

早く着替えてくださいねと言われたのでとりあえず俺は夏服の袖に手を通す。さて、なんだかさらに厄介なことになってそうなおいがぶんぶんしている。

パジャマの下を脱いでいると扉がノックされる。

「はい、ちよつと待っていてくれ」

「失礼します」

待っていてくれと言いながら、待てなかったのか扉を開けて執事服の女性が入ってきて顔を朱に染めた。

「し、失礼しました」

「ああ、もういいよ。どうせ減るもんじやないからな」

さつさと上下とも学生服となる。いまだに頬を無駄に染めている近藤睦月をじっくりと見た。

「なあ、大丈夫か」

「え、何がでしょうか。わたくし、いたって健康なんですけども」

「いや、健康ならいいんだ。ちょっと頑張りすぎかなとここ最近思っていたからな」

目をぱちくりした後嬉しそうにほほ笑んでくれた。

「そうやって蒼疾様に心配されるのは至上の喜びでございます」

「ああ、そりやどうも」

「学校に遅れそうなのでもう一度起こしに来ました。お二人とも外で待っておりますのでどうぞ、お気をつけて」

俺にかばんを渡して深々とお辞儀をするのであった。

「ああ、行ってくる」

とりあえず、今の俺がしなくてはならないのはこの世界をどうにかしないといけないようだ。

玄関先にいたのは先ほどの白銀と、黒金さんを大きくした女性だった。

「なんだ、今日も遅刻ギリギリか」

「すみません、くろが……えっと、本当、どうやら頭を打って名前を忘れてしまったようなんです」

そういうとため息をひとつ、彼女はついたのだった。

「よもや、わたしの存在がこの程度だったとはな」

「すみません」

「ミシエ姉さん、私のこともあろうことか『しろがね』って呼んだんですよ」

ひどいと思いませんかと黒金さんに言っていた。

「まあ、いい。私の名前は白銀ミシエルだ。頭を打っても忘れないように気をつけておいてくれ」

「はい、了解しました」

ミシエルさんね。そういえば、あの魔王さんも言ってたっけか。俺たち三人は歩きだした。白銀、いや、ミカはくるくると廻りながら、ふらふらとしているし、ミシエルさんは冷たそうな表情を一見しているが見守っているようでもあった。

ふと、背後に誰かの視線を感じると耳元でささやかれる。

「放課後でいいから、学校の近くにある喫茶店に来てね」

最後にうふふと笑って声は消え、気配もすでない。

「どうかしたか、蒼疾」

「いえ、何も」

こちらでも勘付きやすいのか俺のほうを見て首をかしげていた。

「小鳥が俺の耳元でささやいていただけです」

「本当、今日の蒼疾さんはおかしいですねえ」

なんだか嬉しそうにミカはそういう。俺はため息をつきつつも、そんなミカの後ろ姿をじつと見ていたのだった。

「じゃ、デートしましょう」

「はあ、なんで俺がお前とデートしなきゃいけないんだよ」

学校、俺の隣の席はミカのようにだった。そして、放課後いきなりそんなことを言われたのである。

「だって、私たち彼氏と彼女ですよ」

「そうなのか」

「ええ、そうですよ」

だから、デートしましょうと言ってくるミカに俺は告げることにした。

「悪いな、今日はちょっと親戚の姉ちゃんと会わなきゃいけないだ」

「親戚……ですか」

「ああ、だから今日はちょっと駄目だ。たぶん、結構大変な用事があると思う。だから、先に帰っていてくれ。わかっているとは思いますが、俺の後をつけてきたり、会話を盗み聞きとか絶対にするんじゃないぞ」

「う、うう、わ、わかりました」

しょんぼりとした感じで教室を出ていく。俺も急いでかばんを持ってその背中を追い越して行ったのだった。

「今度、絶対にデートしましょうねっ」

後ろからミカの声が聞こえてきたので俺は右手をあげてそれに答えたのであった。

校門近く、歩いて三分程度、走って一分ちょっとのところにファミレスがある。

「な、何名様ですか」

「ぜえぜえと息をしている俺にも相手は一応、マニュアル通りにやさしく応じてくれた。」

「待ち合わせを………しているんですが」

「そ、そうですか」

血走ったような目で探していたためか、ウエイトレスさんは俺のことを恐ろしげに見ていた。しかし、今はそんなことどうでもよかつたのであたりを見渡すと、いた。黒いスーツを着ている女性が俺をみてほほ笑んでいる。

「あそこです」

「で、では、後ほどお冷をお持ちします」

俺はその言葉を聞くより先に歩きだし、席に着いた。

「しにが……………」

そう言った俺の口に手を当てる。

「あのね、この世界じゃ私のことはサージって呼んでくれなきゃ、い・ゃ」

「はあ、わかりました。サージさん。というか、名前があるならさつさと教えてくれればよかったですか」

「死神がそうそう名前を名乗っちゃいけないの」

そういつて真っ赤な液体を口に出している。

「で、話ってなんですか」

「そうそう、さつさとこの夢、というかこの世界から抜け出さないと肉体のほう朽ちるわよ」

「え」

「だから、もうあなたはこの世界の神様のようなものよ」

「でも、魔王の話だったんじゃない……………」

「そうねえ、あなたの周りは全員魔王になるとばかり思っていたけど、あなたのおばあさんは魔王じゃなくて、あなたには神になつてほしかったのよ」

最初、サージさんの言っていることが全然理解できなかった。

「あなたの周りは魔王の一般論を唱えていただけ。それにね、人間だつて夜になつたら世界の一つ、作るわよ」

「どういうことですか」

わからなかったので俺は当然のように尋ねる。

「夢よ、夢。夢の中じゃ誰だつて好き放題。そして、死神はそろそろ死んじやいそうなの世界に入り込んでまあ、その創造主を襲つていくのよ。ま、当然昼夜問わず、走馬灯を見せて隙を見て刈つたりしているんだけどね」

笑つて言うような話ではないだろうが、まだ俺の順番ではないは

ずだ。それなら今頃刈られているだろうから。

「あの、この世界から脱出するのを手伝ってくれるんですか」

「おかしなことを言うのね。この世界はあなたのもよ。苦しいことなんて念じちゃえばなんでも消せる。欲しいものは全て手に入れることができる」

「それなら俺は白銀さんと、黒金さん、睦月に電波勇者、おばちゃん魔王に………死神のあなたがいる世界が欲しいです」

面喰ったかようで俺のことをしばしの間じっと見ていたが、今度は笑いだした。

「なるほどねえ、これは一本取られたわあ。それならここ、出ようか」

「はい」

何も頼んでいない俺が払うことになった。恨めしそうにサージさんのほうを見るとほほ笑まれる。

「こういうのはね、男が払わないといけないのよ」

不敵に笑う彼女がいてくれてこれほど頼もしい事はないと思うのだが、相変わらず飄々としている人物だ。

「どうやってあの世界に戻るんですか」

「これがまた手段は簡単なんだけど、結構刺激的すぎるのよ」

「どうやるんですか」

「こうやるの」

彼女はいきなり左手に真っ赤な鎌を取り出した。

「これをね、あなたの首引っかけて私が引いてあげるだけであっちの世界に戻るの」

「ほ、本当なんですか」

「あん、信じてくれないのなら戻るのは無理よ」

にこつとほほ笑まれてそう言われた。なるほど、確かに刺激的なお目覚め方法だ。

「でもね、その前にやらなきゃいけないことがあるのよ」

「やらなきゃいけないこと………ですか」

「ええ、天使ちゃんと悪魔ちゃん、あの落ちこぼれ吸血鬼ちゃんも戻してあげないと置いてけぼりをくらっちゃうわ」

「なるほど……」

「だから、これから刈りに行かないとね」

ほほ笑む彼女は獲物を狩るチーターのような感じだった。

「ああ、そうそう。言い忘れていたけど、すっかりとあなたが見届けないとまた世界を作り出して逃げ出すわ。前回、それであなたはこの世界を一瞬のうちに作り出したのよ」

「はあ」

「だから、どんなに怖くてもしっぴかりと見ていてね」

サージさんは俺を見て不敵に笑うのだった。

「今度失敗したら、私は助けてあげないから」

「ただいま」

「お帰りなさいませ、蒼疾様……あの、こちらの方はどなたですか」

「睦月、悪いけど向こうを向いて目を閉じてくれ」

「は、はあ、わかりました」

言われた通り、こちらに背を向ける。目をつぶっているのかは分からないが動かなかった。

さっさと首に鎌をかけ、サージさんはひいた。

俺は目をそむける暇もなかったのだが、想像していたような猟奇的なことが起こったりしない。起こった事と言えば鎌が首を貫通し、それだけだったということだ。血も流れなければ首も落ちない。変化があったとするならば、睦月が俺たち二人の前から姿を消したということである。

「よしよし、よく乗り切ったわね」
俺の頭に手を置いてなでている。

「で、天使ちゃんのお部屋はどこ」

「えっと、俺のお部屋にいつもいたんですけどここじゃどうなんですかね」

困ったな、普段どこにいるのか聞いておけばよかった。

「ああ、いたわ」

「そ、蒼疾さん、その女のひと……誰ですか」

廊下の奥に、呆然と佇む一人の女子生徒。

「あら、妬げちゃうわ」

「……さつさと終わらせてください、こんな悪夢」

「彼女はそう思っていないかもよ」

「俺が世界の中心ならこんな悪夢以外でもありません」

素直じゃないわね」と言いながらも、サージさんはしたがってくれた。あっさりとミカの姿が消える。

「さて、対象はあと一人になりました、魔王様」

「なんだか言い方が気になりますけどいいです。じゃあ、後はミシエルさんだけですな」

ミカがここにいたのなら近くにミシエルさんがいるはずだ。俺の考えは適当なのかどうかはさておき、名前を呼んでみる。

「ミシエルさん」

「呼んだか」

後ろにある玄関からミシエルさん登場。俺は驚いて尻もちをついていた。

「おい、蒼疾。この女は誰だ」

きつとまゆがつりあがって俺のことを睨んでいた。

「え、えーっと……」

「わたしのことを手酷くふったあげくミカに走ったこともまだ話を聞いていないぞ」

「あらあら、ここじゃすっごくやりたい放題やっているのね」

嬉しそうに俺のことを見ている。

「こんなこと、俺はしませんよっ」

「どうでしょうね」

それだけ言うときさっさと相手の後ろに回り込む。ミシエルさんははっとしたような表情になったが遅かった。

「もらいましたよ」

それだけささやくと問答無用で鎌を引いた。当然、姿が消えてしまふ。

「ああ、そうでした。最後となったので言うておきますが私があるあなたの周りをちよろちよろし、今回あなたを助けた理由を先に言うておきます」

「なんですか」

俺の首に鎌をかけて彼女は続きを口にする。

「私はこの世にとどまっている魂を連れていくのが仕事です。ですが、なかなか厳しい相手がいますあなたを助けた理由を先に言うて誰ですか、それ」

「あなたのおばあさんです」

俺はその言葉に反論することが出来なかった。なぜなら、すでにその時に俺の目の前にひかれた鎌があったからである。

痛みもなく、何も感じず、俺の意識はあっさりと吹き飛んだ。

第二十四話：世界の創造主（後書き）

こほん、どなたかは存じ上げませんが評価をしていただき、ありがとうございます。さて、次回も読んでいただけると幸いです。

第二十五話：魔法の勉強

第二十五話

「お帰り」

目を覚ました俺の近くに静かに立っていたのはサージさん。

「戻って……………来たのか」

「ええ、まあね」

彼女が指差す先には白銀、黒金さん、そして睦月が倒れていた。

睦月の口からは黒金さんが半分出ており、喰われている途中だったようだ。

「さて、魔界ももう作っちゃったし今度は私のほうを手伝ってくださいますかねえ」

「まあ、助けてもらいましたし構いません。そういえばあっちの世界で俺の祖母がどうかっていつてましたね」

鎌をどこへやったのかは知らないが、先ほどまであった鎌は消えていた。当然、目には違うやばい色が浮かんでいる。

「あゝ、仕事なんて放っておいて死海にダイブしたいなあ」

「それって死間違いだ……………まあ、いいです」

「あなたのおばあさんねえ、これがまた、厄介なことに連れて行くうとする死神を消滅させてるのよ」

困ったものだわあと全然困ってなさそうに言っている。

「何せ魔力は魔王クラスの化け物、束にかかって刈りに行ってもなかなか、ねえ。それで私が呼ばれたのよ」

私ってこう見えて死神の中じゃ結構やばいほうなのよと言っているがまあ、見た目からすでにやばい事は知っている。

「というわけで、手伝ってくれるわよね。ああ、安心していいけど地獄に連れていくわけじゃないわ、天国に連れていくんだからあのおばあさん、死神全部を消滅させる気みたいだからね」

これまたさらりと恐ろしい事を言われた気がした。

「んじゃ、こつちの用意が出来たら呼びに来るからそれまでにそこで伸びてる連中に伝えておいてね」

「はいはいとそれだけ言つてサージさんは消えてしまったのだった。

「なるほど、あれは全部夢じゃなかったのか」

「あれが若様が作り出した魔界だったのですねえ」

「魔界つて言つよりもこの世界を映したただけだったみたいでしたねえ」

三者三様、感想を述べた後に俺は死神であるサージさんの頼みを三人に話した。

「……………シンシア様は……………手ごわいですよ」

「面白そうだな」

「あ、私はちゃんと隠れてますから蒼疾さん、頑張ってください」

そして、俺は自分の身を守るために黒金さんから魔法を教わることにしたのだった。

「魔法はな、信じていればちゃんと答えてくれるんだ。しかし、呪文を間違つたり自分の実力以上のものを使おうとすると失敗するから気をつけるようにっ」

頭には『鬼教官』と書かれた鉢巻きがしっかりと巻かれていたのだった。

「あの、黒金さん」

「何だ白銀」

「なんで私まで教えられているんでしょうか」

「お前、魔法使えないだろ」

「ええ、まあ」

「今回の相手は強大だと聞く。身を守れなかつたら大変だからしっ

かりと受けてもらおうと思っっているのだ。さ、始めるぞ」

ぱちんと指を鳴らすと俺と白銀の前に人形が現れた。ちなみに、睦月は自宅待機となるので魔法は教えてもらわなくてもいいようだった。

「正直、蒼疾に教えることは必要ないだろうが基礎だけ教えておく……『燃えろっ』と叫べば燃えるからな。さ、今から実際に火をつけてみる」

「はいっ」

俺は声たかだかに返事をしたのだが、白銀は微妙な顔をしていた。「あの、今ので終わりですか」

「ああ、そうだ。呪文は『燃えろっ』で構わないぞ。まあ、もう少し高度な魔法を使おうと思うのならそれなりに長い呪文を覚えなといけないけどな」

「ま、まあ、基礎ですからそうですよ。もうちょっとかっこいい呪文かと思っっていたのですが……」

白銀は人形のほうに歩み寄っていくと両手をあげて叫んだ。

「萌えろっ」

俺は初めて魔法を見たのかもしれない。それまで真っ白だった人形の顔がお目目ぱっちり、大きなお兄ちゃん達に受けそうな面に変貌したのである。どっちかという抱き枕か。

「……………燃えませんか」

「そうだな。違う意味で萌えるんだろうけど」

黒金さんはじっとその人形を見ていたがため息をついた。

「白銀、そうじゃないだろう」

「え、あ、はいっ。すみません」

「こっだ、萌えろっ」

これまた呪文を黒金さんが唱えると突如として何もなかった空間に抱き枕が登場。しかも、それには黒金さんの絵がプリントされていた。

「どうだ蒼疾、こっちのほうか萌えるだろう」

何故だろう、かなり自信満々だった。

「燃えろっ」

白銀が突如として呪文を唱えた。すると、黒金さんの抱き枕が突如として萌え……ではなく、燃え始める。

「あ、白銀何をするんだっ」

「すみません、もつと萌える奴を出そうかと思ったんですけど」

「いや、しっかり燃えているから気にするな」

こんなことではあちゃんに勝てるのだろうか。

第二十五話：魔法の勉強（後書き）

たまには暴りたい。ああ、根性入れて、素振りをして、あの面具と銅をつけた人形に襲いかかりたい……そしてストレス発散を……

…

第二十六話：予知夢を見マッスル

第二十六話

神崎シンシア、それは俺のばあちゃんの名前である。ハーフラしいがどこの国の血が混じっているのかは知らないし、興味もない。俺と死神、そして黒金さんと白銀で亡霊となったばあちゃんもたかかった。死闘だったと正直に言ってよかった。結果がすべてと思う人もいるだろうから過程なんてすつとばして結果から言おう。

犠牲を払って俺たちは勝利をつかんだのである。

「いやあ、睦月さん、私の筋肉パンチをお見せしたかったと思いマッスル」

「いやいや、白銀よ、わたしのボディビルバスターのほうが目に焼きつきやすいとおもいマッスル」

犠牲は非常に大きいもので、白銀は二メートルを超えるマッスルに、そして黒金さんも白銀のように二メートルを超えるまっちょよになつてしまった。あと、各自語尾に『マッスル』か『マッスル』を付けるようになったのである。

「若様、これは一体どうしたんですか」

家に帰りついた俺たちを見て睦月は若干引いていた。

「呪いだよ、ばあちゃんお得意の。サージさんはばあちゃんと相打ちになるような感じで連れて行った」

「ぎ、犠牲は大きかったんですね」

俺の後ろにいる二人の筋肉を見上げながら彼女はため息をついていた。

「ふむう、これまで魔法やらなんやらに頼ってきたがこれからはこ

の筋肉一つで、押し寄せる敵をねじふせたいと思いつく」

「それはいい考えですね。私も同感です」

しゃべりながらポーズをとっているこの二人。どうしたら戻すことができるのだろうか。

「と、ともかく、家に入ってください。若様たちの疲れをいやすために様々な料理を作っていますから」

「はっはっは、それは嬉しい限りですね。私の筋肉もプロテインの補給を求めています」

「わたしもだ、白銀よっ」

一歩歩くごとに大地が悲鳴を上げている気がしてならない。地響きだっているし。

「なぜだ、なぜこの白米にはプロテインがかかっていないのだっ。メイドよっ、お前は蒼疾にこのようなそっけないものを食べさせようとしていたのか」

「よ、よらないでください。そこまで筋肉付くと気持ち悪いですから」

「む、それは聞き捨てなりませんね、睦月さん。黒金さんの筋肉、そして私の筋肉を愚弄すると大胸筋で押しつぶしますよ」

「お、恐ろしい宴だな」

「若様、若様助けてください」

二人の筋肉に挟まれて哀れな吸血鬼が俺に助けを求めている。

「その辺にしておいてくださいよ、黒金さん。それで白銀。あまり近づくと睦月が怖がりますから」

「それは心外だな。ああ、なるほど。わたしに抱きしめられたいがためにそうやって気を引こうとしているのか」

黒金さんがいいそうだけど、今の黒金さんに絶対に言われたくないようなことを言われてしまった。

じりじりと俺に近づくと一気に俺を抱きしめた。

「ぐわああああああ」

「わ、若様ああ」

「はっはっは、どうだ、わたしの胸に抱きしめられてうれしいだろ
う」

「あ、ずるいですよ、黒金さんっ。私も抱きしめマッスル」

「ぎゃああああああああ」

「という理由で黒金さんと白銀は家にいるように」

俺はサージさんの隣でそう言った。

「む、そんな夢を信じるのか」

「ま、マツチヨになるわけないじゃないですかっ」

「とっても刺激的な夢なのね。でも、予知夢って意外とあるものよ
くすつと笑っているサージさんは置いておこう。変に構うと面倒
なことになるし。」

「でも、若様一人で不安だと思えます」

「ダメ、絶対に来ないでっ。もうマッスルとか絶対にいやだから」

「むう、蒼疾がそういうのなら仕方ないな」

黒金さんは引きさがってくれたのだが白銀はあきらめていない表情
情をしていた。

「せっかく黒金さんから魔法を習ったのにつ」

「あのな、身を守るために習っただけだろ。危ないから来るなよ。
それに、一応説得しに行くんだから」

そういうと三人は首をかしげ、サージさんは首を振った。

「無駄よ、説得できるような耳を持ってないわ」

「まあ、ワンマン経営者みたいな性格しているのは認めますけど、一応俺はあの人の孫ですから」

「ふふ、どうかしらねえ。ま、そろそろ行くところかしら」

「じゃ、行ってくるから」

「マツチヨになって帰ってくればいいんですよ」

「若様、ご武運を」

「気をつけてな」

不敵に笑うサージさん。そして、俺は墓地に旅立つことにしたのだった。

第二十六話・予知夢を見マッスル（後書き）

新たに評価をしてくれる方がいたようですね、ありがとうございます。しかし、今回の話で評価をもらえないのなら打ち止めですね。筋肉ネタ、大好きな人がいそうなものですが……。夢はでっかくボディビルダー、ふりかけ代わりのプロテイン。まあ、筋肉見えてうっとりする人はちょっと危ない人に見えて仕方ありませんけどね。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0796f/>

3分経ったら天使が出来る

2010年10月9日03時12分発行